

328-258

エ5473

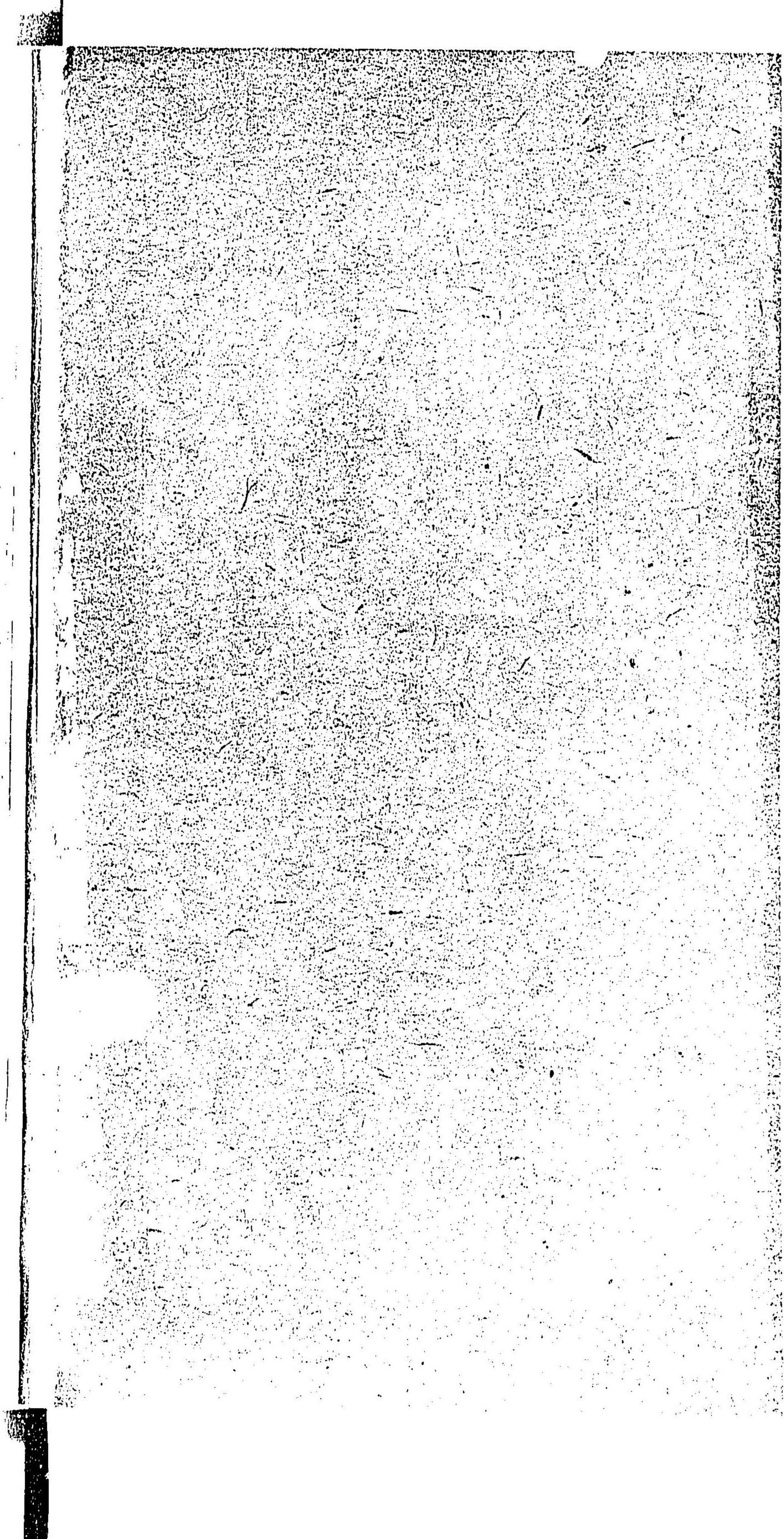
大德寺派管長見性宗般老師題字
精神科學會長横井無隣先生監修

神祕論

奇蹟の解釋

精神科學會

明治
43. 5. 21
東京





觀
地
丹

心
活

步
神
松
雲
心
也



也

凡 例

一、本書を編纂したる目的は、人一度び宇宙の大靈に直參すれば萬古不變の直理を獲得すべきの故を以て、この眞理を提げて天地人生の神祕を解説し盡さんとするにあり。

一、著者は一生を心理學研究に獻げんと期する者にして、多年、微才薄識の身を鞭撻これ努め以て斯學に思を潜めをれり、而して十數年來催眠術の原理の至幻至妙なるに感奮し、且夜これが考究を懈らざりき。

一、本書は、宗教、哲學、及び現代二十世紀の進歩したる科學と相提携して人生の爲の催眠術の地位を確立せんとしたるものなり。心理學の爲めに研究されたる催眠術は學理に止まる、人生の爲の催眠術は實用的なり。

一、上編に於いては宇宙の眞理を明かにし、諸宗教の教義を解説し、而して心理學上に列する催眠術の原理と其の見解とを宣べ、宗教の根本義と斯學の原理と些の抵觸する所無く、同一義に出づる旨を説述せり。また、

處世法上に一日も缺くべからざる眞義をも併せて斯術の暗示論によりて詮議したり。

一、下編にありては、古今、東西、人間の見て以て怪奇と倣せる種々の妖魔術に似たる現象を説明して剩す所なきに庶幾きを信ず。

一、讀者本書を閲讀して、批議せんとするならば乞ふ學會に高旨を提供せられよ、吾徒は喜んで共に俱に研覈を懈らざる可し。本書の卷尾に附したる購書割引券は斯學研究者のために便宜を與へんため聊か學會の微意に出づ、研究に疎ならざる讀者は躊躇なく此の機會を利用せられん事を乞ふ。

編者識す

神祕論序

仰いで彼の蒼穹に思ひ、俯して是の大地に考ふ、何等の不可思議をや。日月の光明、星羅の光芒、悠々たる大空に懸りて嚴然たり、眼をあけ思ひを馳せて彼を視、是を考ふれども到底不可見不可思量の事に屬す。而も亦俯して野徑に生ふる一草を視るも猶ほ驚異を感じずんばあらず、翠綠滴らんとする其の葉、眞紅燃ゆなんとする其の花、造化の至妙をこゝに窺ふべく、自然の神祕をこゝに視るべし。天地間の森羅萬象、寔に不可思議を極め、寔に神祕を盡くせり。その間に介在する人類の棲息も亦これ一つの神祕のみ、天地より人間をみれば只これ蠢々として動く蟲蟻の如きものなるべきも、然れども斯くの如く弱少なる人間にしてその靈妙なる能力は天地と共に宏大なり、宇宙の大法を究むるも人間の力にして、自然の神祕を開かんとするも亦人間の手にある寶鑰なり。不可思議と云ひ神祕といふも雖も、眞摯なる人間の考量と努力とに由りては未だ

必ずしも研覈し得ざるものにあらざるなり。宇宙の眞を求め、天地の理を究め得たらんには、初めに驚異の眼を瞻りしものを、ろくに嚴然として存する大法あるありて諸種の現象となれるを知り、釋然、神祕の奥底を解決すべきこと容易なるべし。

吾人が孜孜として研究し來りたるものは即ち宇宙の眞理を求め人間の大道を開かんためにして、或ひは古來の聖賢にこれを訊き、或ひは東西の書籍にこれを獵り、以つて漸く吾人の學理に主義と教條とを獲得したるものにして、これを大聖釋迦の前に説かんも些の誤謬を發見せられざるべく、これを大聖孔子の前に講ずるもその首肯する所なるべく、これを大聖基督の前に齎らさんも決してその叱咤を受くる虞無し、眞理を説くものは、釋迦といはず孔子といはず基督といはず皆同一の壇上にありて教條と形式との差違はあれども根底は即ち一なり、故に吾人が眞理を宣する所以のものこれら大聖賢者之道を同トウするものにして、釋尊の説法も吾人の演説も、孔子の講學も吾人の傳道も、基督の叫

喚も吾人の布教も、もとより毫末の差無からんとを期待するものなり。口に筆に吾人の爲すところのもの、假に吾人の口と筆とに據れども、その根本思想は古今の聖賢が抱懷したる眞理にあり、吾人にして慎みて口を開き、戒めて筆を執るにおいては、是れ吾人の云ふ所にして實は釋迦の演説なり、孔子、基督の宣説なりといふを得べく、吾人の戒慎するものこゝに存するなり。

吾人は如上の見解と眞摯をもつて、渾身の努力を傾注して今日にいたれり頃者感ずる所ありて此書を編纂するもの、吾人研學の餘暇になるといへども、もごより熱心と忠實とを缺くにあらず。題して神祕論といふ、希夷として視るべからず、冥沓として量るべからざるもの、古今、これを神祕と稱し遂に不可思議不可解のものと爲せり。然れども神祕は遂に神祕にして量るべからざるが不可思議は永久に不可思議にして解すべからざるか、吾人は斷トて斯くの如く疑問を疑問として放擲するを好まず、不可思議を思議し、不可解を解決せんとするは學徒の努力なり使命なり權威なり。現今、世界は物質的に長足の進歩を

なし、科學界に於いては發明相踵ぐ、一たび電氣の發見によりて雷神の迷信を破りたるが如き類のこと朝暮に現はれつゝあり、飛行機の發明のときも現代人のなしたる奇蹟といふべく、科學の權能は實に神の如き莊嚴を把持したるものなり、かく發明相踵ぐ時代にありて精神界においてのみは、未だ神秘を開くべき鑰無きかの如きは學徒の耻辱といふべし。元來、科學界の發明なるものは一つの神秘の扉を開き出したるものゝゆゑにして、科學者等は刻々孜々神秘の迷宮に光明を點つゝあるものなり。科學者既に然り、吾人宇宙の大靈を感能する學徒にありて、何ぞ迷宮を破るの遲きや。

神秘論一書、僅かに吾人の餘暇になれるものなるが古來不可思議のものとなして思量の外におかれたる種々の現象を説明し、何人といへども容易に解するを得しめ、また、神秘の鑰を自己の手に握りて縱横に使用するを得せしめたる効果は世の認めらるゝ所ならんと信ず。

何人といへども生れ乍らにして天地の理を知り自然の眞を感得する者あるべ

き。人は皆、生死の不思議を感じ、萬物の不思議を感じ、自己自らの不思議をも感ず、漸くにして研學讀書等の効により人生の意義天地の眞理を知るに至るなり。されば人は各々天地人生に對して討究心なからざるべからず、眞理を知らずしては人にして人にあらざるなり。只にこれを知るに知らざるとはその一人の幸不幸に止まらずして人類全体の幸不幸また天地生々の理に反するなり吾人は人を指導する自らその任にあらずといへども苟くも天下の憂を憂として起つもの、かくのてごき小冊子を編むも猶且つ根本の主題はこゝにありて存す。神秘を開くといふも、奇蹟を説明すといふも、人類を圍める大自然大宇宙の奇夷を求めてこれに解決を與へ多くの不可思議底のものを論議しつくすにあるなり、讀者これを諒せよ。

山茶花一輪挿したる机に倚りて

著者識

上編目次

一、自然觀

(一) 自然の神祕

生死の不思議——休和尙の懺悔——ラゼラネ王子物語——天體の運行——
動植物の關係——天地は一大秘密——

一頁

(二) 神佛の本體

哲學の起原——宗教の起原——諸宗教は皆一歸趣——釋迦基督は同一人——
神佛不二——我徒は神佛を翳す——宇宙の大風光——

六頁

(三) 絶體の暗示

天地は吾人の父母——佛教と吾人の自然觀——茶碗は私の叔父である——萬
物相關の理——真理の發露——絶體が人間に與ふる暗示——

一二頁

二、宗教觀

(一) 教義と信仰

汎神教と一神教——基督と日蓮——釋迦の人格——バイブルと佛典——信仰
の意義——自己暗示は信仰なり——

一七頁

(二) 宗教の權威

宗教の必要——大道の案内者——人格の復活——我國の建國——神國とは宗
教的國家の意——元祿の快舉——國民性と宗教——外人の日本研究——國民

二三頁

元氣の根本——

(三) 布教者の爲したる催眠術……………二九

吾人の見たる布教者の態度——弘法大師の開教——即身成佛義——清涼殿の

奇蹟——大師入定の大暗示——日蓮の立正安國論——確乎不拔の覺悟——八

幡社頭の第一暗示——龍の口の首の座——日親の辻説法——迫害又迫害——

陰莖に竹串を貫く——日親の預言的中——奇蹟と催眠術——

(四) 信仰とは暗示の効果なり……………四一頁

信仰ある者は社會の優勝者——レソションの意味——神佛は吾と共にあり——

——佛陀の遺教經——神佛と人間との暗示關係——催眠術者と宗教家の握手——

三、人生觀……………四七頁

(一) 處世の道……………四七頁

青年と戀愛——煩悶死を決す——人生五十歳の一夢か——眞の處世法——

催眠術は世の羅針盤——

(二) 意義ある生活……………五一頁

醉醒夢死に終る勿れ——須く自覺すべし——精神修養の眞義——釋尊總ての

勝感に勝つ——心靈の自己催眠——

(三) 精神界の不思議……………五六頁

學理と實際——學理は人爲にして人は自然の所生——理外の理——

下編 目次

一、概論……………六一頁

奇蹟の解決

原始人と現代人——科學猶ほ宇宙の奇蹟を解決す——科學と宗教——精神界

の學問と神祕——出山の釋迦——野の試みに逢へる基督——天生我必有用——

——何人の行爲にも意義あり——

二、各論……………六八頁

奇蹟の説明及び實驗

(一) 眞言祕密法……………六八頁

弘法大師入壇灌頂の極祕——顯教と密教の異同——理源大師三十八回の加行

——阿字觀は自己催眠——眞言祕密の印契——九字の切方——

(二) 降神術……………七七頁

降神術の定義——降神術と巫覡口寄縣神子椅神子稻荷降しの關係——稻荷降

の方法及び實驗——自己暗示の發動——歐米に於る降神術——羅馬法王と降

神術——佛國巴里に催されたる降神術大會——歐米に於ける降神術の方法——

——普變によつて神意を知る——テンプルメーニング——日本の降神術——國

民性と信念の關係——戰場の進退と降神術——僧行教と降神術——日本の降

神術は上古より眞面目——

(三) 仙術……………八八頁

仙術は容易に實行し得——仙術の字義——仙人も人間である——仙人の名稱——蔡の源七も仙人か——龍に乗りて大空を翔る——白石を叱して羊と化す——八十の老翁壯者となる——催眠術を知らぬ者は仙術を否定す——久米仙と喜撰法師——昇天降地の大自在——

(四) 忍術……………九七頁

伊賀流の忍術——カリシタンパツテレンの一派——五曜の遁形——印度の忍術——龍樹菩薩婦女を弄ぶ——徳川政府高等探偵と忍術——原田甲斐の忍術——石川五右衛門の忍術——

(五) 見神術……………一〇五頁

神の存否——見神術の種類——催眠術の精神に及ぼす作用——託宣神告の二説——心理學より觀たる見神術——佛耶二教より觀たる見神術——科學者の見解——神靈感接の事實——綱島梁川の見神の實驗——

(六) 氣合術……………一一二頁

一聲の氣合敵を倒す——自己の運命は氣合の刹那——塚原卜傳——但島守猛虎を一喝す——氣合の奧秘——無言の氣合法——社交上の氣合——先づ對手を心服す——氣合とは即ち暗示術なり——

(七) 讀心術……………一一九頁

處世上に必要な讀心術——ボーツモスの樽廻折衝——家康を觀破したる木

村重成——一家の主婦と讀心術——釘と云へば槌——以心傳心——布教師の肝心——思ひ内にあれば色外に現はる——

(八) 火伏の術……………一二六頁

物理及心理學より觀たる火伏術——修職者の行ふ方法——現今神道家の行ふ方法——内外人の驚嘆——學術上の解決——心頭を滅却すれば火も亦涼し——

(九) 不動金縛術……………一三二頁

明王尊靈の威力か——逃走者の足留——最近の實例——盜難除としての金縛法——

(十) 禁厭術……………一三四頁

大已貴命と少彦名命——禁厭と祈禱——禁厭萬能の時代——弘法大師の修法——アセラウツケンソツカ——三密加持の深趣——暗示も亦加持なり——

(十一) 三脈術……………一四〇頁

守田寶丹の三脈術——澁澤男爵の信仰——日露戦争の實例——危難を豫知する方法——

(十二) 斷食法……………一四二頁

雲を甜り霞を吸ふ——燻肉不二——ハスケル療法——光線と空氣は人間肝要

の食物——病的作用の食欲——完全なる食事の法則——断食療法の實例——
酒精中毒の全瘥——雲照律師の食事と其の健康——

(十三) 幽霊對話術

靈魂とは如何なるものか——中江兆民の靈魂論——自動車と靈魂——輪廻轉
生説——幽霊出現の時——良心の苛責に生ずる幻錯覺——暗示は幽霊と對話
せしむ——

(十四) 神通力

神通力の別名——神通力と今日の學説——催眠状態中の神通力——潜在意識
の靈動——日本には神代より行はる——慧果和尚の天眼通——日蓮の神通力
——歐米に於る千里眼——鏡に話しかけて二百哩の遠さを視る——覺醒中の
神通力方法——天然的神通力と實例——日本にては學術的研究を忘れず——
人と人との間に無線電信を通すべし——期米株式變動の豫知——

(十五) 幻術

幻術の起原及名稱——佛教と幻術——安倍晴明と幻術——巨石中空に昇る——
——神史及び院本に現はれたる幻術——伊國少女の幻術と歐洲學者の驚嘆——
神祕の扉を開けば概ね平凡なり——幻術の解決——

(十六) 不良少年感化法

不良者の生ずる原因——不良少年を養成する學校——上流社會と公德心——
上流社會及び富豪は其不良少年を如何に處置するか——不良少年の社會に及
ぼす害毒——感化の困難——矯正法の唯一なる手段——

(十七) 禁酒禁煙法

酒なくては日の暮れぬ國——酒害の子孫に及ぼす影響——飲酒と罪惡——三
池監獄の統計——習慣は禁酒断行を許さず——飲酒の興奮は虚偽の作用——
癌腫と喫煙——催眠術と禁酒禁煙——

(十八) 説法療法

精神の肉體に及ぼす關係——六十%は惡染なり——虎列刺菌の嚙下——心身
相關の理の實驗——一言の暗示にて肺病を全治す——一言の暗示にて肺病に
罹る——説法療法の要領——如何なる病氣も對座の説法にて治す——

(十九) 惡癖矯正法

なくて七癖——癖より來る不慮の災害——惡癖矯正の統計的證明——根本的
精神矯正法——

(二十) 難病治療法

一九二頁

一五二頁

一五八頁

一六八頁

一七二頁

一七七頁

一八二頁

一八九頁

實驗上の證明は千古の眞理——治療成績の統計的證明——二十五年間の癲癇
五回の暗示にて全治す——多淚症及び喘息治療の實例——宿痼忽ち癒ゆ——
無催眠療法とは如斯——大神を落す——昇天の感——老母極樂見物をなす——
——神通力實驗の例——孤軍より駒——多年の宿望漸く達す——居ながら數百
里の處を知る——成功のかすく——悪性の感化——嗟々先生の治術は其れ
神の如き乎——難病治療の一要件——

三、結 論……………三〇頁

奇蹟の原理及び其方法

記憶術……………二二七頁

記憶とは何ぞ——記憶を増進せしむる方法——

神祕論 上編

一、自然 觀

自然の神祕——神佛の本體——
絶對の暗示——

(一) 自然の神祕

習慣といふものは物を無意味にして丁ふ、初めて見た吉野満山の花盛
りは、

これはくとはかり花の吉野山

と驚嘆もする、また、はるくこ都を出で、陸奥の果に旅衣、初めて彼
の日本三景の一といはれてゐる松島を見たときは、

松島やあ、松島や松島や

こ只その絶景に恍惚として了つたといふが、吉野の花も松島の風景もこれを見慣れてゐては綺麗にも思はず風光明媚にも思はれない。それと同トやうに人間がこの大自然の中に生れ出で、日々生活をつゞけてゐる事も、誰れも彼も皆、喰つて、眠つて、やがて墓の中に行くのたゞ永い間の習慣に物事を無意味に見て了つてゐる。けれども人間の生れる事も不思議なれば、死ぬことも一大不思議である、その他何事によらず、吾人は天地自然の不思議の中に生活してゐるのである。若し人間といふ不思議なもの、天地自然といふ奇妙なものを初めて視るものがあつたら、吉野の櫻や、松島の風景に驚くどころか、何とも云ふ事の出来ぬほど驚異する事であらう。

正月はおめでたいものと永い間の習慣にきめられて、正月は芽出度い以外に何の考もなかつたところへ、ひまつくり一休和尚が竹の竿に鬮を揺りつけて、

元日は冥途のたひの一里塚

芽出度くもありめでたくもなし

と怒鳴り歩いたら初めてなるほど一年々々墓に近づいてゐるのたゞ人々が自分を省るのた。

西洋に面白い小説がある、サミュエルギボンソン博士が書いたラセラス王子物語といふのたが、これにはラセラスといふ王子が深宮の中に育つて世の中のことを何も知らずゐたのが、ある時、王宮を抜け出して世の中に出ると、人生は紛糾を極めてゐる、美しい女もある、醜い女もある、富めるもの貧しきもの、また、美しく見えた事もない花もある、草もある、木もある、雲の影、月の姿何一つとして驚かれぬものはないといふので、初めて天地自然、人間社会を見る感を書いたものなのた。哲學的な、神秘的な、有益な小説である。誰が讀んでも、天地の靈妙に驚かされるやうな氣がする書物た。

元來、吾人は地球といふ、不思議なもの、世に接んでゐるのだが、この地球は宇宙にボツリと掛つてゐて、二十三度半といふ地軸の傾斜をもつて一晝夜に一回廻轉し、非常なる速力で三百六十五晝夜に太陽の周圍を一回廻りするといふ。そして春夏秋冬といふ四季が生じ、花が咲き鳥が啼り、種々の生類が接息してゐる。また、地球の衛星の月が地球の周圍を廻つてゐる、そうかと思ふと數へきれぬほどの天體がある、動く星、動かぬ星、地球に十幾倍の大きさといふ天王星海王星とか、不思議な恰好をした彗星とか土星とか、實に天文學の少しの智識をもつてしても宇宙の宏大無邊こそその不思議を極めてゐるには驚嘆せざるを得ぬのである。

彼の太陽は一大瓦斯體の燃焼してゐるのだといふ。その光線と熱とによつて吾人生類が命を以つてゐられるのだ。また、空氣といふ靈妙なものがあつてこれが吾人の呼吸に刹那も無くてならぬものである。吾人は

空氣から酸素をこつて炭素窒素を排出するが、するに植物はその炭素窒素をこつて酸素を排出する、まるで動物と植物で滋養物の交換を行つてゐるのだ。植物がなければ動物は生きてゐられない、動物が生きてゐなければ植物も亦枯死の運命となる。

斯ういふことを一々あげるまでもなく、實に注意して吾人の周圍を考へてみれば、不思議をきわめたものなので、天地自然は一大神秘なりといふことが合點されるのである。

日月星辰、森羅萬象、みな神秘の影である、神秘の姿である。そして斯くいふ吾人一身にこりてみても、實に是れ一つの神秘である、如何にして生れて來たのであらうか、死して行方は何處であらうか、

闇の夜に鳴かぬ鳥の聲聞けば

生れぬさきの父をこひしき

未だ生を知らず、何ぞ死を知らんやで、寔に心細い話である。けれども

人間はこりくの樂みもあり慰めもあつてその中に兎に角生活してゐるのであるが、併し天地自然の一大神祕であると同く人間も亦神祕の塊なのである。

(二) 神佛の本體

寔に一大神祕の中に吾人は生命を保つてゐるのであるから、天地間の物を一々仔細に考へれば、雜然紛糾、たゞく不思議な、神祕なと嘆息するより外無くなつて了ふ。それならば、天地自然などには眼をくれず一切何もかもお構ひ無しでをれといはれても、人間に眼がある以上、心がある以上は、見ずにも思はずにもゐられぬ。そして如何に是を視ても、如何に是を考へても已前宇宙自然の神祕は神祕として判らないからこれを研究するために哲學が起つた。また、宗教の起源もこゝに生じたのである。

原始時代の野蠻無智な人等は、自然に向つて多くは恐怖を抱いたのである、恐怖の結果、これを尊敬して崇りの無いやうに祈禱をした。早い例が今日では吾人が原動力に使用して最も便利を得てゐる電氣も古代は雷神として恐れ怖いてゐた、風の神と云ひ、山の神と云ひ、その他自然物を神と祭つて恐懼的に尊信したのである。

が、宗教の起原は即ちこの幼稚な恐怖時代に芽を出したので、印度をぞでいへば、古くから火教とか婆羅門教とかいろいろの教があつた所へ釋迦牟尼佛が出て、これらの幼稚な誤謬の多い教を悉く改革して佛教を興して釋迦牟尼佛が諸方に學問修行をしてあるいた當時は、印度では哲學者の輩出時代であつた、九十六種の外道といふから釋迦牟尼佛の教派以外に九十六派の學派があつたのである。勿論、釋迦は當時の精髓を執つて自家の教理を立てたのであらうけれど、兎に角、古代原始時代の人類が天地を感じて神を作つたに初まつて永い間、とりくの人間が天地

の神祕を探り探つて一つの完全な宗教が編たてられるに至つたのである。希臘の教でもまた印度のやうな経路をこつて進んで来たので、その他何處の宗教も多くこの型で今日に至つたのである。人によるご佛教より基督教が好いとか、基督教は淺薄た佛教のやうな奥義がないとか、やれ天主教に限るの、儒教た、道た、今日では天理、教たなど、宗旨の優劣をいふ者があるけれども、吾人はこんな偏見は一切こらないのである。苟くも天地の神祕に根底を起き、自然の眞理、宇宙の眞面目に教義を得來つた教ならば、その歸着する所は皆一つである。佛教よりするも神道より行くも儒教より入るもやがて皆一つ所に到るべきである、天地の眞に二つは無い。

わけのほる麓の道は數あれど

同ト高峯の月を見るかな

で決して眞理を教くものなれば、何の宗旨でも同一である。宗教の信者

は悉くこれ同行者である、互に助けあい手を引きあふて進まねばならぬのである。

斯くの如き吾人の見解をもつてすると、宗教をいふ所の神或ひは佛なるものは總て一つになるのであつて、釋迦も孔子も基督も教義の上からいへば同一人と見て差支がないと思ふ。これは吾人が殊更らに奇矯の言論をするのでばない、彼の高僧空海が眞言の祕法を傳へて來たとき、吾邦古來の神道と結びつけ兩部神道を開いたのは同トくこの見解である。眞理を本尊としてゐた空海には神體も佛像も一つに見えただのである、神佛不二は蓋し空海の卓見といはねばならぬ、若し今日の世に空海がゐたならば基督教をもまた自家藥籠中のものご爲し基督如來といふようなものが出来たかも知れぬ。

本來無東西 何處有南北 迷故三界城 悟故十方空

西といひ東といふともそは假りにつけた名である悟了すれば十方空なり

とある、實にその通りであつて、宇宙の眞理が、哲人聖人の教へ説く方法によつて或ひは神となり、佛陀となつたまでの事である、基督は眞理を指して神と云ひ「我が父よ」と呼んだので、釋迦はまた同ト眞理を目して法身佛を視たのである。故に苟くも吾人の説くところが眞理であるならば、吾人の事業は釋迦、基督のなしたるごと、同一の事業を營んでゐるのである。吾人が眞理を高く駭してゐるのは即ち神佛を高く駭してゐるのである。

雨霰雪や氷とへたてども

溶くれば同ト谷川の水

要するに如何に多くの宗門宗派といへども、溶くれば同ト谷川の水の一つ眞理に歸着するのであつて、然れば神佛の本體は即ち宇宙の眞理そのものでなければならぬ。

玄妙不可思議をきわめ、錯綜紛亂、寔に窺知すべからざる如き、大白

然、大宇宙の神祕の中を探りに探つて古哲古聖等が獵得したる眞理そのものが神佛の本體である。

而して、人類が小さき眼をあけて、凝視した宇宙の神祕そのものに大眞理が包藏されてあるのだから、宇宙如是の大風光がまた即ち神佛の眞面目なのである。

溪聲自長廣告

山色是清淨身

山の巍々たる風光も海の洋々たる壯觀も、いづれか神佛の姿ならざらんやである。斯く雄大なる自然觀をもつてすれば、吾人の一擧手一投足も皆無意味なものではない。苦じき人生にありての所作にあらずして、天國の樂園に歩むのである、佛土の極樂世界に起つのである。娑婆即寂光土と云ひ天地如是經といふも是の悠々たる境北を稱するのである。

三 絶體の暗示

不可思議、玄妙にして量るべからずと視た宇宙間の森羅萬象も、これを一言にして真理の當體といへば盡くしてゐるのであつた。

是れ天道なりと云ひ、是れ天の命なりと説く儒教もまた是の間の消息を宣明したものである、天地の大自然が人間を生じたのであるから、天地は吾人の父母である、既に天地が吾人の父母であるならば子は親に従はねばならず、即ち吾人は天地の道に従從しなければならぬ。天地の道とは即ち如々として、また、照々乎として人間を導く真理の光明である、吾人の父母は天地である、天地の本體は真理であるといふ時、真理は吾人の父母であつたのである。真理の子であるならば、神の子であることも佛陀の子であることもいふ事が出来る。吾人の父母は神でありまた佛であるのである。嗚呼如何に美しくしくも嚴しくも、人間は生れ出でたもの

▲天地は
吾人の
父母

であるまいか。佛教には、

草木國土悉有佛性
一切衆生悉皆成佛

等の句がある。天地間にある總てのものは皆成佛するといふのた。是れ亦吾人の自然觀と同一の眞理である。天地が人間の父母であるならば、草木も土塊もまた天地を父母とするもので、即ち草木と人間とは兄弟同志であらねばならぬ。是れも今日進歩したる科學が説明してゐる、蠶にも鳥渡いつたが、植物と動物との滋養交換、即ち植物が不用として排出する酸素は動物の一刹那の間も斷つことの出来ぬ大切なものである。そしてまた動物が不用として排出する炭素は植物の最も大切な營養素である。植物無ければ動物の生命亡び動物の生命亡ぶれば植物悉く枯死をまぬがれず、寔に動植物の關係は親密なものではないか。人間と草木が兄弟たといつても決して嘘言ではないのである。

▲佛敎は
吾人の
自然觀

また、一例をあげる。此處に一個の茶碗がある、この茶碗ここへに入る私とは何の關係もないやうだが、實に大變を親しい間柄なのである。一體この茶碗は何から生れたかといへば土で作られたものである。してみると土は茶碗の親である。また、私は米を喰つて生きてゐる、米は私の生命の親である。米は稻が土から生るので出来る米の親は土だ、米と茶碗は同ト土の子だから兄弟で、そして私は米を生命の親とするから米の子で、考へるとこの茶碗は私の叔父さんに當る。

ほろ／＼と鳴く山鳥の聲さけば

父かごを思ふ母かごを思ふ

さういふ歌があるが、吾人は實に小鳥の鳴く音を聞いても心境を左右される事が往々あるのである。萬物相關の理さういふのはこの事で、天地間の一切のもの皆相關してゐる。

一彈指に須彌山を動かすといつて、指先を一つはぢいても須彌山が動

くさういふのも是の萬物相關の理である。この事は科學の引力説を十分證據だてるこゝが出来、多くの天體と云ひ、地球と云ひ皆引力平均の約束の上はその位置を宇宙に保つてゐるので、人間が地上に起つてゐるのも是の引力の約束の中にあるといふ事は動かすべからざる學説である。してみれば、指先一つ動かしても宇宙の引力に幾分かの影響を與へた事になる、須彌山ごころか、一彈指實に全宇宙を動かすもので、萬物相關の眞理は實に宏大なものなので、殆んど言説の限りで無い。

斯くの如く萬物交互に相關して、混然融和してゐるといふ事は實に莊嚴を極めたものなのである。萬物交互に關聯してゐる以上は、その根底にある眞理が何物にも煥發してゐる筈である。花の咲くも蝶の舞ふも眞理の發露であらねばならぬ。

ありがたや散る紅葉も咲く花も

おのづからなる法のみすがた

▲真理の
發露の

で即ち吾人が、一度び心の眼を開いて大自然大宇宙を見る、到るところに真理の煥發に遭遇するのである。真理の中に生き真理の中に歩、一擧手一投足をなすつゝある吾人は寔にこれ莊嚴なものではないか。花を見るも月を仰ぐも、この心眼を開いてゐたならば、花は真理の香を送り、月は眞如の影をあらはす。

こゝに吾人は萬物相關の真理を説明して、絶体の暗示といふのである。天地自然の真理は絶体の真理であつて、神佛は絶体なりといふも此の意味である。してみれば、天地自然の真理、即ち神佛が人間に與ふる感化といふものは、絶体が人間に與ふる暗示である。

絶体の暗示とは、言ひ換へれば、神佛の權威であり、真理の權威である人間はこの大暗示の中に信念を養はれ、安心立命の地を得て生活することが出来るのである。

▲絶体が
人間に
與ふる
暗示

二、宗 教 觀

教義と信仰——宗教の權威——
布教者のなしたる催眠術——
信仰とは暗示の効果なり——

(一) 教義と信仰

基督教といふとも佛教といふとも其教ふるところ人世を指導せんとする目的に至りては皆一なりまたその根本義に於いて真理を把持して布教傳道、人心救済に努むるは皆その歸を一にするのであるけれども、宗教といひ、教義といふものに至つては多少の相違がある。基督教を信奉する者がまた直ちに佛教を信ずといふ事は、信仰の確立してゐない證據でそんな三日坊主ではならない。即ち、その各々信ずる所を異にし、よしや登る高峯は一つなりとも、基督信者と佛教信者との間に差異があるの

は當然の事である。

假りに云へば、佛教は萬有神教であるが、基督教は唯一神教であるやうに、近時、兩大宗教が互に接近しては來てゐるけれど、神の教義と佛陀の所説には尠からず方法を異にするものがあるのである。

基督の最後は實に悲惨を極めてゐる。マリサイ人の斷々ざる迫害を蒙つて、空飛ぶ鳥、野を走る獸には棲家あり、人の子には宿るべき家も無し」と浩嘆せしめた。遂に十字架につけられて、痛ましい處刑に逢ふたのである。最後の刹那に於いても「父よ」と天なる神父に叫んで勇壯なる死を遂げたのだ。この十字架上に流れた血潮が幾萬の人の靈魂を救ふ因となつたので、日本ならば彼の豪僧日蓮上人が、執權の惡みを一身に受けて鎌倉龍の口の首の座になほつた時、「日蓮は國家の柱礎なり」と叫び、「かゝる小島の主等に迫害せらるゝとも何の畏るゝ所あるべき、日蓮は一切衆生の主なり」と豪語したその精神と似てゐるのだ。で、日蓮

宗が多く、の熱烈なる篤信者を有するやうに基督教が矢張狂熱なる信者を有する所以である。

然るに佛祖釋迦牟尼は基督のやうに迫害は受けなかつた。その最後の臨終の如きも、菩提河の畔り沙羅双樹の間に頭北面西といふ安らかな横臥の中に、諸大阿羅漢達に圍繞されて、涅槃に入られたとある。その安らかな大往生の如く佛教の教義は悠々として迫らざるものがある。基督教がある程度まで反抗的であるの違ひ、佛教は温厚に諄々と教へを傳へてゐる、基督教が感情的なのと違つて佛教は冷靜な理性的である

といふ風に二大宗教の教祖が最後の刹那までもその教風が伴なつてゐるのは面白い事であるまいか。併し乍ら、教義の奥底に到れば、基督も釋迦もそこに何等の區別を置くべきことではない、皆一つの眞理の傳説者なのである。傳説者の性格と境遇、時代とその國民性を異にしたものだから、一つは感情的な宗教となり、一つは理性的な宗教となつたま

である。基督といひ釋迦と云ひ、宇宙自然の眞理を掴み來つて救世の策を講じたことには何の變りもないのである。

この見地からすると宗教の教義は必ず一致してゐるものであるとが判る。基督が「愛」をもつて生命としたのも、佛が「慈悲」を稱へて一切衆生に臨んだのも全く同一の事である。

基督は愛を説いて「若し人汝曹の右の頬を打たばまた左の頬をも打たしめよ」といつた。釋迦は同トやうに、彼の十戒をたてた中に「殺生戒」を加へて一切衆生の生命を保護したのである。バイブルと佛典について一その教條を擧げる日には到底際限がないが、要するに交互に融通一致するところがあるのである。

さて、基督教にせよ、佛教にせよ、その教義を些の疑惑なく信じて、之れを實行して行くのが、信者の勤めであつて、信仰の導い意義がそこにあるのである。只、如何にその教義を知つても知つただけでは駄目だ

バイブルの一字一句をも餘さず暗誦した所が何にもならぬ、佛教八萬四千の法文を悉く讀破し、八宗兼學の勉強をした所が、一向自身に實踐する所が無ければ何の價値もないのである。

日蓮上人がいはれた言に、信仰の消息を明かに傳へたものがある。「只經文を口ひのみ讀みて心に讀まざれば甲斐なし、心には讀みても身に讀まざれば日蓮が信者には候はず」と。經文を口先で讀んでも駄目だ、世の中には口には立派なことを云つて演説もする紳士たちがあるがその行ひは一向口でいふ所と違ふそれでは何にもならぬのである。また、心に讀むといふのは諺にもあるやうに「感心上手の行ひ下手」で、好い理屈を聞けば、只、ナール程その通りだと感心はするが、すぐ尻から抜けて了つて、感心したやうに行ひが出来ない人なのである。さすがに日蓮は、かくの如くにては信仰を得た者でない、口にも心にも讀みても、吾自身身に讀み味はねばならぬと喝破されたので、經文を身讀する、即ちこれ

が信仰の意義であると言われたのだ。

佛の道を聞いても、神の教を知つても、それを直ちに自家日常の行爲の上に實踐躬行し得なければ信仰者ではないのである。知つて行はぬのは知らずして行はぬ者よりも一層悪い事になる。無信仰の者は未だ許すべしだが、信者だと稱して而も偽善を働いてゐる者は斷つて許すべからざるものである。

教義を知り、その教義通りに實地に行爲をするといふのが信仰の意味であるから、信仰とは教義を堅く自己の精神に刻みつける事なのであるで、吾人の眞理として信ずるところの、暗示の關係が教義と信者との中に成立しなければ、信仰を得たことも、吾れは何宗教の信者なりとも云ひ得ないのである。

教義に十分の權威があり、その上信者の方にその教義を信ずるといふ熱心なる思想、即ち自己暗示が効果を奏しないと信仰といふ事は成立し

ないのだ。

(二) 宗教の權威

天地自然の一大眞理を根本義となして、人生の歸趣を教へ、人間の心靈を覺醒せしむるもの、これが即ち宗教と名づけらるゝ所以である。人生は一日も宗教無くしてその秩序を保つてをる事は出来ない、宗教無き人生は闇黒である、宗教無き社會は混亂を極むる筈である。人世に規矩を與へ、社會に道德を教へて、進歩發達を遂げしむるは全く宗教の賜物である。

人間一個人にとつても、一日たりとも宗教無くして、世智辛き世の中を渡ることは出来ない。神と云ひ、佛といふも、皆これ吾人に強き力を與へ勇氣を與へ慰藉を與へて、こゝろ憂き世を安泰に生活して行けるやうに導いて呉れる案内者なのである。この案内者を失へば吾人は行手の

道に迷つて了ふ。神や佛といふ心の案内者がなかつたなら、人が皆勝手
氣儘に振舞つて、社會は絶えず争鬭の巷を現するばかりだ。

空蟬の世のここには迷はずば

六つのちまたも一筋のみち

で、神佛の教に隨ひ迷はずに行くなれば六道輪廻の巷も只一筋の大
道となるのである。佛を人天の依師といふのもこのことであつて、人
生を指導し人間を教化して行く大勢力、即ち宗教の權威がこゝにあるの
だ。

● 基督は「吾れは罪人の爲めに來れり」と叫んで、良心の苛責に艱む者を
救濟した。佛陀は「一念發起すれば罪障悉く滅す」と唱へて人心を導いた
昨日までは罪惡の人として社會からは排斥され、親兄弟にも愛相をつか
された者でも、宗教の道を聞き正しき信念を起せば、直ちに今日からは
善人となるこゝが出来るのである。吾人に復活といふ尊い精神作用を起

▲大道の
案内者

▲人間の
復活

さすのは、實にこれ宗教の權威によるのである。

宗教の權威は實に宏大無邊であるから、古今東西偉人とか豪傑とか萬
人にすぐれた行爲をなした者を見れば、その大精神の根底は必ず宗教を
基礎としてなつてゐるのである。殊に我が日本などは建國の始めから宗
教的に國體が出来てゐるので、天孫瓊々杵命が高千穂の峯に降られてよ
り以來、萬世一系の天皇上にありて蒼生を愛撫され、忠良なる臣民下に
ありて忠勤を勵んでゐる。我國の天皇は實に神の御裔である。そして、
蒼生萬民がまた天兒屋根命の御裔であるのだから、寔に我が大日本帝國
は神國なりといふこゝが出来るのである。

▲我國の
建國

神國といふことは即ち宗教的國家といふ意味である、國家全體が宗教
的に成立してゐるのであるから、烈日の赫々たる如き宗教の大權威が我
が大日本國には常住不斷に灌がれてゐるのである。國家に遍く滿ちわた
つてゐるこの宗教的精神があればこそ、一朝事ある毎に我國民は大活躍

を爲す事が出来る。古く元寇の役に於いても、十萬蒙古の大軍が押し寄せ來り、旗鼓堂々大威喝をなした時に當つて、我國民は如何なる活動をなしたか、實に十萬の敵を斃殺して、生還する者僅に三人といふ大快事を演じたではないか。

また近く、播州赤穂荻屋の城主淺野長矩が、恨みを含んで切腹して盡した時、國家老犬石内藏之助良雄以下四十六人の義士が、臥薪嘗膽の苦をつくして遂に仇敵を討つた。良雄が辭世に、

極樂の道は一とすぢ君ごもに

阿彌陀をそへて四十八人

と豪吟したのである。是の元祿の快舉をなして日本武士の精華を上げた良雄等の如き者には阿彌陀だらうが大日如來だらうが釋尊だらうが、極樂の道案内をして行つたに相違ない。

更らに近く、彼の明治二十七八年戦争と云ひ、また日露の大戦と云ひ、

我國の國威が全世界に發揮して、極東の一小島國が實に世界の大本營國となつた所以のもの、皆、一旦緩急ある毎に國民性が煥發したからである。

戦争のみに限らず、商工業の何れを見ても、日進月歩のありさままで、大發展を遂げつゝある現今の花々しさ、やがて我國民が世界の覇を握る日があるに相違ない。これ皆、我國體と國民性との然らしむるもので、宗教的に建國された國家の當然斯くあるべき事なのである。神國と稱してゐる我が國威が煥發したので、即ち國體が保持してゐる宗教的大精神の權威が發現したのである。

近時、世界の各國が、日本の大活躍を見て、何故に然るかを研究し初めた。ある學者は、日本國民には何か特殊の精神があるに相違ない、そしてその精神の發露は斯かる結果を來したのであらうといつて、日本の精神界を矢鱈に研究して、日本には武士道といふものがあつて、この武

士道が國民性を涵養したのだといつてゐる。

それから又た或る學者は、日本は神道があるために正しい國民が出来たのだといつてゐる。或る學者は、日本には佛教が早く傳道されて、その宏大なる教義が釋迦の生れた印度に亡び、また支那に亡びてゐるに拘らず日本がこれを獨占してゐるのは不思議の一つで、日本國民の大精神を作つてゐるのは是の佛教にあるのだといつてゐる。或る學者は支那の儒教が日本に於いて新らしく日本化されて新儒教となつてゐる爲めに精神教育が確立したのだといつてゐる。

外國から遠眼鏡でのぞいて、いろいろいふのだから勝手放題なことをいつてゐるのだ。併し吾人は、神道といはず武士道といはず、儒教も佛教も混然融和して、人心の上に現はれた結果、我國民性が成つたのであると信ずるのだ。言を換へていへば、日本の偉いのは國民すべてに宗教的精神が涵養されてゐるからなのである。外國でも宗教の隆んな國民

▲國民元
無の根

は偉いのであつて、英國など獨乙なごその適例である。要するに我大日本國の偉大な所以は、國體からも國民性の上にも宗教的精神が溢れてゐるからなので、宗教の權威は即ち我國民の權威となつて現はれてゐるのである。

(三) 布教者の爲したる催眠術

前項に於いて宗教の權威を説いたが、この宗教の權威を提げて、天下に傳道した布教者の行爲を研究して吾人の感想に映したものを述べてみよう。これ吾人の研學の上から布教者の行爲を説明するものなのである。彼の基督が橄欖山上の奇蹟、及び釋迦牟尼世尊が菩提樹下の奇蹟等、苟くも一宗教の教祖がなしたる數へがたきほどの奇蹟については、しばらく之を措いて、日本に於ける布教者の二三をあげてその權威ある行爲をみる事にする。

▲吾人
見る
見る
見る

眞言宗を齎らし來つた彼の弘法大師が、唐より歸つて、一宗の寶幢を翻へした當時、既に聖德太子以後天下に傳播した佛教も僧侶が勢力を得るに従つて墮落して了ひ、奈良、京師の諸寺とも頗る風教があがらなかつた。そこへ、弘法大師が新宗派を建立して堂々の教陣を張つたのだから、天下の僧侶は初めて警鐘を亂打されて深夜の夢を破ぶられた觀があつた。

殊に大師の説く所は、從來の舊佛教と撰を異にして、舊僧侶が未來の安心、極樂往生といふやうな事を説くに反して、宗教は即身成佛の義を説き凡佛不二の意を明かにした、遠い極樂にまで行かずとも是の世に於いて成佛する、死んで後ちのことでなく生きてゐるうち、この身のまゝ直ちに佛となるといふのである。父母所生身速證大覺位と稱し、父母の生んでくれたこの肉身このまゝ佛の位に上れるといふのである。

ふして戀ひおきて忍べご亡き人の

ためには何をなむあみだぶつ

で死でから後ちに佛になつたつて何の甲斐もない、生身即成佛しなればならぬと説いたのであつた。

靡然として萬民の歸依を得たのは當然である。が、僧侶共は實に大師の言説には驚かされた、即身成佛などそんなことが出来る筈はない。空海といふ青年僧が何を生意氣をいふといふ風に諸山の老僧共は扼起こなつた。大師が支那から歸つたのは、今でいへば、洋行歸りだから、空海のハイカラ坊主め位に諸山からあしらはれたのであらうで、天皇の御前で宗論を試みやうといふ事になつて、大師は各宗の老僧共と清涼殿に大議論をせられたが、無論各宗の僧は破られたのだけれど、負惜みにも議論はさうでもないから我々の見る前で即身成佛をして見せろといふ微笑を含んだ大師はその時、南面して眞言を誦し印契を結んで結伽趺座せられると、五彩の光明大師の肉身より輝き五智の寶冠、虚空より降つ

て大師の上に止つた、即ち遮那の真相を示されたので、畏くも天皇も大師を禮拜せられた、一座の老僧共も畏れ入つて了つて合掌し經文を唱へたといふ。

これが大師の奇蹟中有名な話であるが、大師は高野山に寂を示されるに際して、入定して生身を是土に止め、微雲管をもつて日々信者の上を監視すると誓はれた、今に密宗の信徒は、

ありがたや高野の山の岩影を

大師は今にめぐりまします

と讃歌を唄つてゐる。吾人より之を見れば、大師は自身の死に際してまで、世人に大暗示を與へて置かれたのである。他の諸宗の宗祖と異なりて大師の偉大なる點はこゝにあると思ふ。

次に日蓮上人の事蹟に移る。時は文永五年、蒙古より使節來り北條執權に迫る、その文辭暴慢をきわめて禍心ある事明かである。天下は今

▲大師の
暗示の
大

▲日蓮の
立正の
安

にも戦争が初まるか人心恟々たる有様であつた。併しこれは文永五年を去る十年の以前に日蓮が豫言したことで、法華經を信せざれば七難三災來る、その最後は他國侵逼難なりといつたことに符節を合したのである。が、日蓮が安國論は執權時宗の容れる所とならず空しく十年を過ぎたのであるが、蒙古牒狀の事あるや、日蓮またく執權を相手に豪語した、日蓮はその弟子擅越等に説示して曰く

佛滅後二千二百二十餘年の間、迦葉阿難等、馬鳴龍樹等、南岳天台妙

樂傳教等たにも未だ弘め給はざりし、法華經の肝心、諸佛の眼目たる

妙法蓮華經の五字、末法の始に、一闍浮提に弘ませ給ふべき瑞相に

日蓮先驅したり、若黨共二陣三陣つゞいて、迦葉、阿難にも勝れ、天

台傳教にも越ゆるよかし。僅かの小島の主等が威さんに恐れては閻魔王

の責をば如何にすべき、佛の御使と名乗りながら、臆せん事は無下の

人々なり

▲唯乎不
悟拔の死

と、その牢平として抜くべからざる決心、如何にも布教者の覺悟として立派なものであつた。が、遂に幕府のために捕へられて文永八年九月十日龍の口に斬られることになつた。日蓮馬に乗せられて鶴ヶ區八幡の前を過ぐる時、大音聲をあけて、「いかに八幡大菩薩は眞の神か、日蓮は日本第一の法華經の行者なり、身に一分の罪無くして刑に引かれんことをば神には如何に見たまふぞ。いそぎおんはからひあるべし。」と自ら八幡宮に日蓮を如何にかして助けよと云ひ入れたのである。警護の武士共にかくして、日蓮は第一の暗示を與へたのだ。もしこの時、武士共の顔色は青くなつてゐたに相違ない。

やがて龍の口の濱邊に着きて圓座の上を下ろされ、太刀取りは後ろに廻つて三尺の秋水を抜きはなつた。日蓮が命は一瞬の裡に迫つたのであるが、忽ち天地は大不可思議の現象を呈した、當時の模様日蓮自ら記したものがあつた。

江の島の方より月の如くなる光物の鞠の如くなるが飛び來り、辰巳の方より戌亥の方へ光り渡る。頃しも十二日の夜の味爽に、物の形も定かならざりしが、物の光り月の如くにて、人の面も皆鮮かに見ゆ。太刀取眼くらみて倒れ伏し、兵共も怯ち怖れて一町計り走り退き、或ひは馬より下りて畏まり或ひは馬の上に躡まるもあり

その光景見るが如くた、鎌倉中の驚愕はこんなだつたらう。日蓮聲を勵まして「如何に殿原かゝる國家の大罪人を獨り差し置きて何所にか退き給ふぞ」と大喝した。天地も亡ぶかこ恐ろしき光景の中に、日蓮のこの大喝を受けたので、兵共は再び顛いあがつた。光り物がまた八幡宮の方から飛んで來たことも見ゆたらう。之れ日蓮が與へた、第二の暗示の聲であつたのだ。

滿身是れ膽と稱せられた、執權北條時宗もこの注進には驚かされたこと見ゆ、日蓮を斬ることは中止になつて、翌十月十日佐渡に流罪するに至

つたので、日蓮の暗示の威力が執權時宗をも屈伏させたのである。

また是の日蓮の高弟日進上人の弟子に日親といふ僧があつた。この僧は日蓮の再来かと思はしめる程の大奇蹟をなした。足利將軍義教の應永三十四年一月末より京都に上り一條戻橋の袂に立つて辻説法を初めた、日蓮が彼の四個格言をそのまゝに、眞言亡國、律國賊、念佛無間、禪天魔魔と他宗の墮落を痛罵して、一乘法華の妙法を説いたのである。

かくて、數年の間、辻説法を繼續してゐたが、日親は宗祖のそれと同く、時の政府に上書して、他宗を棄て一佛乘の法華に歸依すべしと建白すること再三再四に及んで、未だその容れられざるを見るや憤然として、大論文を作つた、立正治國論と題して將軍に献じたので、宗祖日蓮と同く政府の怒りを買ふて獄に下つたのである、

時は永享十二年二月六日。それより獄中にある一年有半、この間、日親がうけた迫害は聞かたに戦慄せしむるものがある。

先づ獄舎を高さ四尺五寸、廣さ疊四枚を布くのみの中に、實に日親を苦まじめんため三十六人の囚人を鮓のやうに押し込んだ、その上天井裏に長さ七八寸の大釘を隙間なく打ち込みて、頭をあけることの出来ぬやうにしてあつた。

また炎天に引出して、日親を眞中に置き、その周圍に薪を山と積んでこれに火を放ち「汝ち口に題目を棄て、念佛を唱へよ、然らば罪を許すべし」と迫つた。けれども日親は遂に南無妙法蓮華經を高唱して已まなかつた。ある時は寒中、素裸にして庭上の木に縛し、これに水を灌いで迫害した。曰く「汝念佛を稱へよ」と、けれども日親は遂に題目を高唱して已まなかつた。是種の拷問は幾度なるを知らず、だが、不思議にも日親は身體形容些しも衰へず益々元氣に題目を高らかに唱へてゐた。

甚たしいのは、日親の陰莖に竹串を貫いた事もある。赤く灼熱した鉄を兩脇に抱かした事もある。そして最も慘酷を極めたのが、今に日親

を稱して「冠鑑日親」と云ひ、俗に火傷した時に「日親様く」と念ずれば疼痛を去るといふ傳説の原である。それは、獄吏が如何に日親を苦しめても一刻も題目を唱ふるを止めず、顔色身體少しも衰へぬをみて、最後の極刑と、一つの大きいなる鎗を焼いて日親が頭の上に載せた、頭上は見ると、焼け爛れる、さすが鬼の如き獄卒共も見ると堪へない惨しさである。けれども、日親は従容自若、顔色も變へず、益々聲高かに題目を唱て已まなかつた。

將軍義教これを聞いて、憤懣措く能はず、使を獄中に遣はして日親に向ひ「法華經の行者を苦しむる者は現罰に逢ふといふが、將軍の身に恙なし、如何」と、日親色を正して「あゝ、將軍現罰を望むか三年の間に奇禍あらん」と、義教再び「三年間など悠長なことをいふ、笑ふべきのみ」と、日親聲を厲まして「よし、然らば百日を出でずして現罰あるべきのみ」と、後九十九日、即ち嘉吉元年六月二十四日、將軍義教

は赤松滿祐のために弑せられた。日親の預言は全く的中したのである。この預言の的中云ひ、慘酷極まる所刑を受けて身體に何等の變化もないといふ日親の事は、實に一大奇蹟ではないか、人間の精神と肉體との關係に、事實の説明を與へてゐるのである。而して此忍ぶべからざる極刑を受けたる日親が、天壽八十二歳の長命をして、一代の尊信を受け、日蓮宗の精華をあけて世を辭したといふことは、また、實に奇中の奇、祕中の祕、今日進歩したる科學の智識をもつてするも、解決は出來ないのである、併し日親の生涯の大事實は、科學の小さき智識を外所に、嚴然、歴史の花と咲いてゐるではないか。

以上、二三の例をあげたのであるが、大師の即身成佛と云ひ、日蓮の預言、龍の口の奇現象と云ひ、日親の凄まじき事實と云ひ、これが何故に然るかの説明は今日の科學上などからは何等の解釋を與へることが出來ぬのである。併し、吾人の研學はこの般の眞理を説破して餘す所がな

い。此の項に題して布教者之催眠術といへるもの、即ちこれ等の奇蹟が催眠術の研究したる學理によつて解説するを得べきをいはんがためなのであつた。

弘法大師が、天皇の御前に於いて、諸山の高僧の前に於いて、端嚴なる遮那の真相を示し、肉身より五彩の光輝を發し、空中に五智の寶冠を現せしも始めに大師の諄々として説きたる教義の説明が、大暗示となりて、即ち不知不識に催眠術の感能が現はれたのである。日蓮上人に於いても亦然り、預言とは斯學にいふ天眼通である、日蓮の、信念と研學と熱心なる布教傳道の精神が、凝つてもつてこの天眼通を得たので七難三災の預言が出来たのである。龍の口の怪の如きも、日蓮が八幡社頭の暗示が感應したる一つのヒプノナズムである。日親上人が疼痛を感ぜざるものも吾人が日常行ひ得る無痛術そのものであつて、義教將軍現罰の預言の如きは日蓮の預言と同一義のもの。繰り返していふ、眞理は一つな

り、大師も日蓮も日親も、そのなしたることを自覺せぬにせよ全く是れ催眠術に外ならずである。

(四) 信仰とは暗示の効果なり

これあるが故に火にも入るべく、これあるが故に水にも飛ぶべく、秋霜烈日、大勇猛心を獲得するのが宗教を信奉する賜である。信仰ある者は勇ましく、正しく、こして最も清い生涯を送ることが出来る。信仰ある者は何時も社會の優勝者として起つ。威武も屈する能はず、富貴も狂ぐる能はざる底の、識見を持つて、堂々として自己の職分を盡す事が出来るのである。

で、人は誰れしも信仰をもつてゐなければならぬ、すべての人が信仰心をもつてゐれば、人間世界は常に清い尊いものである、彌勒出世の時といふものも此意味である、理想の世界といふも斯くの如き時代を望む

のである。天國は高きにあるのではない、佛土といふも遠きにあるのではない。信仰を人類全体が把持した時、此の世このまゝ天國となる、佛土となるのである。

さて、この信仰なるものは、如何にして得らるゝものであらうか、これはいふまでもなく、宗教を信するより生ずるのだ。宗教とはレリシヨン即ち結びつけるといふ語原から出たので、人と神とを結びつけるといふ意味なのである。神或ひは佛と人間とが遠くはなれてゐて、人間は神佛の存在を知らず、神佛は人間と没交渉であるならば、信仰なるものは未たないのであるが、神佛の御手と人間の手とをつかり握手した時、忽然人間の精神に生ずるのが即ち信仰である。

神佛と人間と握手するといふのは、神佛の説くところ教ふるところに人間が心の底から敬服し感謝し隨順して、道を守り教へを實踐する事なのであつて、神の説くところ、佛の教ふるところを自己の心に確乎と括

りつけるのである。自己の精神に佛神の教説が感得したならば、吾れは神と共にあり、吾れは佛と共にありで、吾人は直ちに神佛と握手して起つてゐるのだ。既に神佛と共にあるのだから、何の恐るゝものがあるか、穢される事があらうか、で、こゝに勇氣が生ずる、清い生活が出来る、奮闘的の働きが出来るのである。

彼の釋迦牟尼佛は、三千年の昔に寂を示したのであるが、吾人が釋迦牟尼佛の所説、佛敎の妙旨を信奉し得たなら吾人は、三千年の時間を貫いて直ちに釋尊の前に起つことが出来る。釋尊は涅槃のとき、遺敎經を説かれて、吾れは今こゝに假りに寂を示すといへども、決して汝等と離れるのではない、吾れは吾が説いた敎の中にあるのだから、吾が教へを信する者と常に共にあるのである。といふ風に説示されて、釋尊の肉體は亡びても佛敎は即ち釋迦であるから、佛敎を信する者は釋尊と共にあるのだといふのだ。印度といふ遠い國の三千年の遠い昔の釋尊であつ

たが、今、その教を信ずる吾人は、この日本國の現代に於いて釋尊と共にあるのである。

斯くの如く、大なる威力を有する信仰心を、心理上から説明してみれば、吾徒の宣揚する學理が一層明瞭になる。信仰といふ事は、人が神の言葉をそのまゝ、自己の精神に受け容れた状態なのだから、神佛と人間との間に暗示の關係が成立したところなのである。て、神佛は催眠術の施術者の位置にたち、人間は被術者の位置にあるやうなもので、施術者がいろいろ暗示を與へる、被術者は與へられた暗示通りの行爲をする、この場合が信仰心を生じた精神状態であつて、神佛の人間に與へる暗示は即ち基督教なり佛教なりの教理なのである。神佛が與へる教理の暗示を人間が受け容れたとき、信仰の關係が成立して、人間は神佛と握手したのである。

吾人は常に研究を懈らずに進んで來た、併し吾人の研學をもつて直ち

にこれが一つの宗教たとは云はない。催眠術が宗教であるとは云はないけれど、宗教の肝心たる信仰の精神状態は、全く催眠術にいふ暗示關係であるとは斷言する事が出来るのである。してみれば、神佛の教理が人間に暗示となつて効果を生じたのが信仰といふ尊いものとなるのであるから、催眠術者の人格にして高く清いものであり。して術者が被術者に與ふる暗示を、佛教やその他の宗教の教理をもつてしたならば、その與ふる暗示の効果は直ちに被術者に信仰心を惹起せしむる筈である。かくの如く、理想的に催眠術を行ふ事が出来たなら、敢て吾人は催眠術の名づくべき一種の宗教的權威を斯學に認めるとが出来て、即ち吾人の活動は宗教家、傳道布教者の行動と全く同一途に出づるのである。斯學に志さず者は、須らく、斯くの如き崇高なる決心と覺悟を要する。然らば斯學の學徒は人世の爲めに道を教へ、人類の爲めに救済を叫ぶべき、布教者である、救世者である、吾人は釋尊や基督やその他人間のために

献身的活動をなしたる先哲古賢の驥尾に附して以つて微力を盡くさなければならぬ。

こゝをもつて吾人は常に催眠術者の人格を論議して己まない所以である。苟くも道を説く宗教家にしてその人格が陋劣であるならば、如何に神の言葉を借り佛の金言を説くとも何の効も無いのであつて、吾人が他に暗示を興ふるとも亦その理は一つである。吾人の人格にして清く高きものでなければ、清淨無垢、權威靈妙なる暗示の効果を他に與ふるとは不可能である。吾人は飽くまでも先づ自己の精神を鍊磨して崇高なる人格を作らなければならぬ。

三、人生觀

處世の道——意義ある生活——
精神界の不思議——

(一) 處世の道

神と云ひ佛と云ひ、宗教と云ひ學問といふも、皆如何にして此の人生を送るべきかについて、人間の絶ゆる苦悶に、一道の光明を興ふるころのものなのである。

人の少年時代はたゞ嬉々として何の苦しみもなく暮らしてゐたのであつたが、次第に成長して青年期に入れば、初めて種々の煩悶苦惱が生ずる、戀愛を感じ來るも此の時である。

世の中に戀ひしきものは父母の

▲青年
戀愛

外にあらトと思ひしものを

父母に甘つたれてゐた涎くりが、忽ち形を作り思をやつして戀心に苦しむ事となる。これがために山よりも高き海よりも深き父母の恩を棄て、男女相抱いて非常の最後を遂げるにも至る、華嚴の瀧、淺間の噴火口が青年を呑んだのも多くは戀愛のため氣を腐らした若者の所爲なのであつた幸ひにこの戀愛に身をあやまられなくとも青年には人生の混亂したありさまが、不可解に見ゆる、人生は謎であると思はれる、如何にして此の迷路多い世に處して行かうか、生存競争の劇烈な今の時代は殊に青年の心を痛ましめる、彼等のあるものは、一つの躓きから自暴自棄の心となつて、酒色に耽溺して了ふ、ある者は過度に精神を慳ました結果病的不思想に墮して健全な生涯をおくる事が出来なくなる。洋の東西を問はず、何れの國、如何なる地にありても、多くの青年は當面の人生に苦悶を繰り返してゐるのである。

▲四死
を決す

が、かく苦悶の中にも、光陰は人を俟たず、歲月さながら流るゝ、如く過ぎて、昨日の紅顔も今日は白骨の老となる。そして、兎も角も、苦しみと懊みの中に身を支へて、やがて、墓の下に這入るのである、生れて苦しみを重ねて、やがて墓に墜ちる、これが人生であらうか。

世の中は何にたどへん朝ひらき

漕ぎゆく舟のあこなきが如

寔にこれ人生五十年、蘆生が一夢に過ぎないのである。古詩人が嘆息の聲である。が、人生に對する嘆息の聲は今も猶ほ到所に聞ゆるのである。歳々年々花相同、年々歳々人不同であるが、その同トからぬ人が同トやうに人生の謎解をくりかへしてゐる。

然らば、この人生に處して行くに、如何なる思想、如何なる方法でいつたならば、眞の生活が出来るかといふに、それは個人々々の性質によつて道を求めなければならぬが、要するに自己の根底に一つの信仰を

▲人生五
十年の
一夢

把持し得らるれば好いのである。基督を信するもよい、佛教を信するも好い、何の宗教でも信奉して精神の基礎を定むれば、猶如火宅の人生にありて、泰然事を成す事が出来るのである、艱難辛苦も恐るゝに足らず些の煩悶懊惱を感じないのである。

憂きことの猶この上につもれかし

かぎりある身の力ためさん

艱苦に處して大勇猛心を起す事が出来るのである。信仰は力なりといふ消息はこゝにある、その偉大なる力が心身に加へられたら、人生何の吡嘆を要せんやである、處世の道は坦々として目前に横つてをる。

併しこの處世の道を見出すに要する、信仰、即ち偉大なる精神の力を催眠術は容易に他へ與ふとが出来るのであつて、人格の高き術者が暗示の大威權を提けて人に臨み、その精神に強大なる力を加へ、人世に處して毫末も過誤なく、安泰に生活し、熱心に事業に従事せしむる事が出

來るのである。

右すべきか左すべきか、進まんか退かんか大沙漠の中に迷ひ疲れたる旅人に一縷の道を教ふるが如く、或ひは萬里の滄溟、汪洋たる大海に漂ふて行手を失へる舟子に北斗七星が方向を教ふるが如く、沙漠に似たる人生、大海の如き人世の波に漂ふてゐる者に道を教へ方向を教ふる權を催眠術は有してゐる。

蓋し催眠術は處世の道を示すべき暗示の大權威をもつてをるのである

(二) 意義ある生活

人間と生れいながら、天地自然の理をも知らず、自己の精神の靈妙なるをも知らず、碌々として一生を過せし、醉生夢死に終るこいふのは實に無意義な生活であつて、たとへ百年の長命を保つとも、生れて直ちに死んだ嬰兒と一つで人として完全に生存したとはいは

理想的にいへば、人として知り能ふ限りを知りつくし、爲し能ふ限りを爲しつくして、墓に入りたいものた、これ完全に人生を送つた事なのである。

併し人生萬能のものでないから、理想的に完全するは不可能であらうたゞ、理想に近い意義ある生活をなして世を送りたいものである。で、理想に近い意義ある生活とは、自己の心霊の覺醒によつて行ひ得るものなので、即ち人が自己の精神の機能を自覺した上に現はれてくるのだ。自覺といふことは深い意味がある、人の精神なるものは、天地自然の眞理と相關して存在するのであつて、神といひ佛といひ、皆、人間の精神に潜在してゐるのだ。魔と云ひ鬼といふこともみな人間の心にあるのだ。心外無別法とか己身の彌陀とかいふのはこの事である。

傀儡師胸にかけたる小箱

佛出さうと鬼を出さうと

即ち我が心一つで、神佛とも通し悪魔波旬とも通ずるのであつて、このところを篤く考へ、悪魔の眷屬となることも、神の子佛の弟子となることも自己の精神の保ちかた一つにあるのだ、さては緊禪一番しつかりしなければならぬと決心を起したなら、是が立派な自覺であつて、その自覺を動かさず、實踐躬行して行けば初めて意義ある生活が営まれるのである。とは云ひ、

心こそ心まよわす心なれ

心に心、こころゆるすな

で、自己の精神は神佛と通ずるのたご自覺した曉でも、猶、ともすれば心猿意馬の狂ひがちになるのであるから、心に心、こころゆるすな、一時間も氣をゆるしてはならない。かくして永い間も心を鍛練してゆくのだ。精神修養はこの自己を自覺してから更らに益々心を磨きあげることなのである。

世の中には多くの誘惑があるその甘い暖かい誘惑の手を拂ひ退けなければならぬ。彼の佛祖釋迦牟尼が迦毘羅衛國王の寵兒と生れて、王宮の中に何不足なく暮らしたのであるが、一朝、心靈の眼を開いて、一切衆生のため出家成道なさんと王宮出奔の決意を極めた、恰度十二月の七日の夜、今宵こそ出城の本懐を貫かんと猛然起ち上つたが、さすが不石ならぬ身の最愛の耶須陀羅妃と恩愛の別れが惜しまれた。即ち後宮に入つて見ると。夫婦の別れ一夜に迫れりとも知らず、妃は美しくむき夢に入つてゐるのであつた。妃のこの容姿を見た悉達多太子の衷情は甚麼であつたらう、その美しくしき黒髪、愛の泉をたゞむたるその胸乳、紅匂ふその頬、あはれ我がいとしき妻よ、今こそ夫婦一世の別れぞと、胸は萬斛の涙を湛へたのである。一度び決心はしたものの、明くる朝になりて我が出奔を知つたとき妃の驚嘆は如何に、これを思へば出城を思ひ止まらんかと太子はいく度か我れと我が心に迷つたのである。けれど、誘惑の手

を拂つて遂に曉深く太子は愛馬乾抄に鞭をあげて王城を去つた。若し太子が妃の愛著にひかされて出城を思ひ止つたなら今日佛教は無かつたのである、が、太子の大精神は誘惑に勝つて一切衆生のために迷ひの闇を開いてくれたのである。

また、悉達多太子が諸方に研學修行をなしたる上、退いて苦行林の傍なる菩提樹下に端座し冥想を凝らした、誓つて曰く、道若し成らずんば是の座を起たさるべしと。然るに慾界の魔王は三人の美女をして太子の身邊にいたらしめ、種々の痴態を演じて、太子の肉情を挑發し、誘惑を極めしめたのだ。が、太子はこれらの忍ぶべからざる誘惑にもすべて打ち勝つて遂に正覺を成り、即ち三界の救主佛陀となられたのである。

吾人が、理想に近き意義なる生活を送らんとするには、この佛陀の如き大勇猛心をもつて、多くの誘惑と戦はねばならぬ。自己の心靈を自覺し來つて、確乎たる心念に住すると共に、その行爲は勇氣と眞面目と一

刹那も油断なく人生に活動して行かねばならぬ。

一日に三度己れを省みよといふ三省の教も即ちこの心を寸時もゆるめぬ意味なので、吾人をもつてすれば日々夜々、天地自然の大法が與ふる大暗示を躰得し、また、日々夜々、自己の心靈自らが本來具有する眞精神をもつて、自己が自己に暗示を與へる、所謂自己催眠の状態に入つて意志を強固にし、實踐躬行を懈らず、著々その職分を盡して行くならばこれ理想に近き意義ある生活をなしつゝあるのである。

(三) 精神界の不思議

以上、吾人の説き來つた所は、只、冷かなる理性の上においてのみ論ト來つた、所謂理屈づめであるけれども、學理としては斯く説明するより道がないのである。

併し、苟くも吾人は精神界のことを一つに理屈で説明し盡したと信ず

る餘早計なものではない。二と二を加ふれば四となるといふ如き理屈で人生觀が成立するものではない。故に吾人は常に宗教の信仰を叫び、人格の修養を懈る勿れと説いて、人生は斯くの如き理屈のものな杯と概括的に説明は與へたくなないのである。

宇宙と云ひ、人生と云ひ、寔に靈妙不思議をきわめてゐる事は本書の第一項で述べた。人間の精神に於いても實は不可思議の機能が多いので心理學者は、智、情、意の三つに分けて精神機能を説いてゐるが、これも人爲の區別で、智と云ひ情と云ひ意といふも、決して別々に現はれるものではない。靈妙なものなのである。學理は人の作つたもの、人は自然が生んだもの、學理をもつて人を説明しつくす事は不可能である。

吾人は、月が地球の衛星であつて、彼には最早空氣もなく従つて生類の棲息する事なし、その光輝は太陽の光線によるなど知つてゐる、これ、天文學が説明する所であるけれども、吾人は秋夜清澄の時一痕明月

を仰いで、限りなき感想が湧き来るを覺える。

月みれば千々にものこそ悲しけれ

わが身一つの秋にはあらねど

と古人が嘆賞した、その如く吾人も月光の蒼きもの、静かなる大空をながめては、哀感にも襲れるのである。學理をみる月は一個の天體に過ぎないが吾人の靈妙な感想をもつて眺むる月の影は限りない思ひを起さしむるのである。

また今日の學問は、世に幽靈といふ化物のあるをゆるさぬ、墓地に青い火が燃えたといふのも、篝火と判つてゐる。

幽靈の正體みたり枯尾花

こはいふものゝ、深夜獨り、淋びしき墓地に起つてみるこ、鬼氣ものすべく人に迫つて、身柱寒く、何ともいへぬ一種の恐怖を感ずる。小雨

しごくと降る時でもあつて、そこにはつと青い火が燃えたならば、それが篝火である。百も承知してゐても、人は慄然として幽靈を思ひ出さずにはゐられない。これ一つは人間の遺傳性によるとはいひ、兎に角、學理のみの説明では満足することの出来ぬものがある。理外の理もいふべきであらう。

で、世の中には随分この理外の理ともいふべき不思議の現象が數多くある。吾人が、この神祕論を草する上に於いて看過すべからざるものが夥多あるので、これを蒐集し吾人の研學からこの實例について理外の理を説明したいと思ふ。以下本書の下篇が即ちそれでゐる。

上篇に於いて説いたものは、吾人の研究した、催眠術と天地自然の大法との關係或ひは、諸多の宗教との比較研究、若くは人生觀を確立する上に於ける斯學の立場等を明かにしたのであつて、云はゞこの神祕論、

一書の理論篇ともいふべく、また總論を見ても差支ない。次ぎの下篇に於いても實例について説明を與へるもの、即ち各論に入るのである。

神祕論上篇 終

神祕論 下編

概論	奇蹟の解決
各論	奇蹟の説明及實驗

一、概論

奇蹟の解決

一、

宇宙森羅萬象の大風光は寔に大神祕である、而てこの大神祕を構成したる造物主の一大奇蹟が目前如是の現象なのである。

造物主がなしたる一大奇蹟、人類の祖先は之を視て恐怖し震撼し驚異し、而して不可解、不可思議のものとなして只管敬虔の念を拂つて之れに對したのであつた。斯くして原始時代の人類が漸次に發達し來り、幾

原始時代
人

萬の歲月を閲みして、今日に至つては、誰れか原人の如くに宇宙の風光に向つて恐怖するものあるべきか。

天文學は天體及び宇宙の幾部分を説明して過誤あることなく、博物學は動植物、礦物の成因理由を研究して剩す所尠しである。その他物理化學は電氣、磁氣、大氣、光線等の無機體をも説明し盡して人類との關係を明にしてゐる。これ進化したる人世當面の事實で、彼の原始時代の原人をして今の世を視せしめば、是は人間の世界に非ずとなすやも未だ知るべからずである。

故に現代人は科學の効蹟に由つて、造物主の一大奇蹟を全部にあらずとするも、既に解決してゐるのである。

天地自然の外形、即ち物質界のみを研究したる科學に於いてすら、猶且つ宇宙の大奇蹟を説明し得るのである、況んや、常に如々の眞理、希夷の神祕に參ずる精神界の間學に於いてをやてならねばならぬ。

二、

但し、一度び驚くべき進歩をなしたる科學の大威力は、宇宙自然の現象の實體を剖きて一々説明を與へたのであるから、從來、實體より遠ざかつてゐた觀ある精神界の種々なる説議は、科學の爲めに壓迫され破壊されたかの様に見えた。たとへば、宗教が神と云ひ佛と説きしものも科學は實物研究以外に學説を立てざるを以つて、神と云ひ佛と云ひ、科學が捕ふべき實體を認めずとなして宗教は總て迷信妄説なりと棄却した傾きがあつたのである。

然し乍ら、この科學と宗教との氷炭相容れざる如き状態は、實に瞬間の現象に止まりて、昨日の仇敵、今日は骨肉も只ならぬ親密を呈して下つたのである。科學が提供し來る宇宙自然の解説はやがてこれ宗教が神を説き佛を説き來つた、その所説教義を一層確實のものとなしたからである。

十九世紀末は既に過去の一夢と化し終つて、新らしき二十世紀の曙光は科學の力と宗教の權威とを結びつけて、鮮やかに美しく照らし出したのであつた。

宇宙の無窮大、無限無涯の大神祕を説明したのは今日の科學である、而して、宗教はまた既に遠き昔に之を説明してゐたのである、彼の佛教の三千大千世界といふが如き宇宙の宏大無邊を説破した言葉ではないか、また、今日の科學は天體より一人身に至るまで引力作用をもつて調節され各その運動を遂げてゐると證據立てた、動植物の生々の關係をも實證した。これ即ち、所謂萬物相關の理を事實にあげて指示したのではないか、之を觀是を思へば、科學は宗教のために尠くなからざる効蹟をなしたので、精神界の間學と、科學界の研究と此の抵觸無しなのである。以上の如き關係であるから、科學の研究が宇宙の奇蹟を説明したといふ事實は、精神界の間學が既に説明してゐたものに科學が事實的、具體

的證據を提供したことなのだ。

吾人は科學の提供し來る材料を直ちに自家藥籠中のものとなして、宇宙の神祕、造物主の一大奇蹟を説明することに、一層の便宜を得たのである。これ二十世紀文明の賜ものであつて、やがて人類が永い間の努力の効果である。

三、

或る時、人類の一人は高き山に登つて冥想を凝らしてゐた。飄々として空際を亘る風の音、片々と飛ぶ白雲の影、烈日は眩々と輝いてゐる、四邊の草木の匂ひ、清澄なる空氣、青苔滑かなる巖の上に踞して彼は深き沈思に耽つた。そして、やがて夢より覺むるが如く、眼をあげて宇宙の莊嚴を視た、渠はかくて大自然の神祕と冥合したのである、渠は破れ衣に雲を拂ひつゝ山を降つた。是れ出山の釋迦牟尼世尊である。

またある時、一人は曠野の中をさまよい歩いた、天より落つる嵐は野

を掠めて過ぎた、蒼穹草より草に落ちて絶大なる風光は渠の思想に、幾多の新らしい印象を與へた。月は白く東の果てに上る、野は銀色に輝いた黙想に身を忘れてゐた渠は忽然眞理の光赫に照らされた。「我は救世主なり」と叫んだ聲、これ四十日曠野に試みられたといふ、エス、キリストの靈の叫びであつた。

斯くの如きは、人類のある一人々々が、天地の神祕に參じて、造物主の大奇蹟から黙契を得た時、人生に奇蹟の解決を齎らし來つた當時の、意味深き、神祕なる一場の光景であつた。

四、

人は一人として意義あらざるものはない天地の意義と等しき靈妙なる意義があるのである。天地自然が人を生んだのであつて、人は天地自然の分身である。「天生吾必有用」無用の人、無意義の人は一人も無いのである。

多くの人々の爲したる効蹟が、綜合された結果人文の發達、世界の進化を來したのである。

即ち、吾人は自ら當らずといへども、亦、斯くの如き自信をもつて、以下、各項に亘つて、神祕の説明、奇蹟の解決を試みんとする所以なので、各項中には或ひは怪奇をきわむるものありと雖も、而も、嘗つて吾人人類の一人が爲したるものであつてみれば、その怪奇なるをもつて之を等閑に附する事は出来ぬ。

二、各論

奇蹟の説明及び實驗

(一) 眞言秘密法 (其方法)

靈界の偉人弘法大師が萬里の滄溟を渡つて入唐求法の結果、青龍寺の慧果阿闍梨耶から秘密眞言の印可を授かり、入壇灌頂の極秘を相承して歸朝し、地を紀州の山奥に相して七堂伽藍を建て、密教の寶幢を翻へした。日本に眞言宗が布教されたのは實にこれからなのであつた。この眞言宗が他宗と異なる點はいろくあるけれども、他宗はすべて顯教といはれてをり、顯教に對して眞言宗は密教といはれてゐる、即ち佛敎は顯密二教に大別されてゐるのだ。元來密教は法身の大日如來が南天の鐵塔に在つて說法せられてゐた時に、金剛薩埵が鐵塔の扉を排して入り

弘法大師の壇
極密の壇

密教の
壇

親しく大日如來から金口の宣説を受け、入壇灌頂の儀式、師資相承の秘法を授かつたといふのが、密教の淵源となつてをるので、眞言宗の僧侶はこの入壇灌頂といふ儀式に最も重きをおいて、灌頂の壇には、阿闍梨耶は大日如來の師位の相承をもつて接し、受者は金剛薩埵の資位の相承を受けるので、秘密相承の儀式といふのがこれである。一度びこの灌頂を受けた者は金剛薩埵の血脈に連なつた事になるので、人間の肉身をもつて直ちに金剛薩埵の後裔者なる意味のものだから式は一切秘密で、そして莊嚴を極めたありがたいものなのである、如何に經文に委しからうが、如何に說法演説が上手だらうが、この秘密灌頂を受けない者は未だ眞言宗の僧といふことは出来ない。斯ういふわけだから眞言宗が他の顯敎の諸宗と撰を異にして、經文や研學以外に秘密の相承受授があるので學理でなく言論でなく、入壇灌頂の秘密の中に眞言宗の眼目があるのだ。入壇灌頂と一口にはいふけれども是れを受授することは容易で無い。

先づ四度加行といつて二百日の間、相承を受けんとする僧は、精進結齋、毎日天明に起きて水垢離をとり、一日一食の齋を喫り、三時の勤行を懈らずに修め、夜に入つても端座して假睡するといふだけ、實に食はず眠らずで行をする、二百日が終つて初めて入壇灌頂を受けるのである。理源大師などは一生の間に三十八回の如行を修められたといふとて、眞言宗でも、理源大師の止住地醍醐の三寶院は今に修験派の本山となつてゐる。で、この加行にも種々秘密なことが多いのであるが、行中のことは一切他に向つて口外することの出来ぬ掟になつてゐる。要するに眞言宗の本領はこの秘密道場に入つて師資相承を受けることにあるので、さすが眞言一宗の眼目であるだけに道場の中は不思議をもつてみたされてゐる。灌頂の日にあつては諸佛諸天が道場に参詣せられ、法身大日如来を初め金剛薩埵より弘法大師にいたる血脈相承の祖師たち、その他一切の諸佛が並びたつて樂を奏し花を降らして受者を祝福するといふ。至極

玄妙不思議を極むるものである。が、この秘密相承の内容も實は吾人の研究し來つた暗示關係に外ならないもので、暗示の權威が、眞言宗の根本義となつてをるといつて差支へない。

南天の鐵塔内において法身摩訶毘盧遮那如来が金剛薩埵に授けたのも暗示である、弘法大師が慧果阿闍梨耶から受けたのも亦この暗示である。そして眞言宗の檀信徒はまた隱約の間にこの暗示を受けて、それが信仰心となつてゐるのである。秘密の印契を結ぶといふのも、阿字觀をなすといふのも皆この暗示を得んとする自己催眠なので、また彼の醍醐一派の修験者達が熊野に攀ぢ、羽黒山に登り、白山とか大山とかを踏み越えて苦行をするのも畢竟自己の精神を恬淡にして天地自からなる大佛のすがたを拜し奉り、教の暗示を受けんとする修行なのである。

さて爰に以下眞言秘密中の所謂九字の切形と、秘密甚深の大法といふ護身法及びその印契の結び方を略記する事にする。

(一) 淨三業の印 左右の掌を相合せて掌中をうつろにし「唵薩嚩婆
嚩輸駄薩嚩達磨薩嚩婆嚩輸度哈」と五遍唱ふるなり、されば身口意
にて作りたる罪業を滅して清淨ならしむることを得と云ふ

(二) 佛部三昧耶の印 前記淨三業の印の掌を開き物を兩掌に載せ置
きたる如き姿をしながら、「唵吐他藥都納婆嚩也婆嚩訶」と三遍唱ふ
三世諸佛の護念を得て壽命を増し福惠を受くと云ふ

(三) 蓮華部三昧耶の印 左右の五指を開きて、中指と中指と小指と
小指と相接して八葉蓮華の形をかたどりながら「唵跋伽謨納婆嚩也
婆嚩訶」と三遍唱ふ、觀世音及諸菩薩の加持を得て一切の業障を消
滅すると云ふ

(四) 金剛部三昧耶の印 左掌を下方に向け右掌を上部に向け左右の
兩掌の指を密接せしめ中指と小指とを各釣ひ如くに引きかけながら
「唵嚩日盧納婆嚩也沙嚩訶」と三遍唱ふれば金剛部の諸尊の靈顯を

蒙り一切の病難を除き堅固の體となると云ふ

(五) 被甲護身の印 兩小指を以て十文字形となし其兩又各藥指を
懸けて堅く握り中指と中指との尖端を合せ人指指の尖端の背部に付
け中指と中指とを密接せしめつゝ「唵嚩日羅銀爾鉢羅捺跋也婆嚩
訶」と五遍唱ふれば諸の天魔の障碍を除き一切の厄難を避くと云ふ
以上を護身法と云ふ其印の結び方及び呪文の唱へ方は其人によりて多
少の相違がある、多少の相違が有りても結果は同一である。禁厭の條に
述べた如く印及び呪文其物が効力あるに非ずして暗示の力が効果を生ず
るものなる故に油桶ソッカの奇語に於て亦同一の効果を見るの奇僞が出
來するのである。

次に九字の結び方であるが、九字は根本の呪語九文字より成るが故に
この名がある、之を縦横法とも稱へる九字とは即ち「臨、兵、闘、者、
陳、烈、在、前」の九語である俗に此法を行ふを九字を切るとも云ふ。

臨、獨古印

左右の手を内へ組み、中指を立て合す

兵、大金剛輪印

二手を内に組み、挿指を立て、中指にてからむ

鬪、外獅子印

左右互に中指にて頭指をからみ、大指無名指小指を立て合す

者、内獅子印

左右互に組み、中指を無名指の交叉にからみ、大指頭指小指を立て合す

皆、外縛印

両手を外へ組み合すなり

陳、内縛印

十指を互に内へ組み入るゝなり

烈、智拳印

右の四指を握り、頭指を立て、左手にて頭指を握る

在、日輪印

左右の大指頭指の端をつけ、餘の四指を閉き散す

前、左の手を後に握り、右の手を上置く

而して口に「悪魔別伏御敵退散七難速滅七復速生祕」と唱へて息を

吹き入れ、印を解いて、刀印即ち頭指と中指とを立て、他の指を握り、刀を

以て物を切り、拂ふ状を空中になすのである、其切り方は臨と横切し、

兵と縦切し、鬪者、皆、陳、烈、在、前、と五横四縦に切り、拂ふの

である。

此印の結び方も術者によつて亦多少の相違はあるが前に述べた通り効力が爰に在るのでないから、差支はない、修験者が之を行ふには實に熟練したもので、前記九個の印契を殆んど一つの如く呪文を唱へつゝ、連続して

之を行ふので其手先の莊嚴にして呪文の奇警なる人をして剛た寒慄せし
かる、この莊嚴なる行爲が即ち被術者に暗示を與へるので靈驗は之から
起るのである要するに眞言祕密法を効力あらしむるには印契の結び方を
あざやかにして其手先に充分の莊嚴を備へ總ての態度に威嚴を示すのが
最も必要であることは後段を通談せば自から理解せらるゝのである。

(二) 降神術 (其方法)

降神術とは自己若くは他人の身に神靈を感應せしめて過ぎ去りたる人
または遠く隔たりたる者の意思を知り且つ現在及び未來の吉凶禍福の諮
詢する術である、自己の身に神靈を感應せしむるもの、即ち自身の體へ
神を乗り移らして吉凶禍福を判断するものには巫覡、口寄、縣神子、梓
神子、稻荷降し等の種類がある、就中稻荷降しは現今降神術の中で最も
流行して居るもの、一つであつて特に關西地方に於いては最も多い、こ

の稻荷降しの状態を説けば降神術の如何なるものなるかと云ふことは類
ひ知ることが出来る。

稻荷降し、これは術者によつて其形式は同一でない、予は其形式を以
て稻荷降し其者に直接の關係が無いものと認めて居るから、爰には予の
實見した一婦人の稻荷降しを紹介することにす、時は四十二年十一月
中旬所は大阪東區八軒家の或旅館の女將、年齢四十歳位が約三ヶ月以前
より病氣に罹つて醫療の手當は充分に盡したが更に効驗が著はれないの
で頻りに氣を揉んでゐたが、偶と伏見に稻荷降しの名人が有るからと聞
いて早速之を招聘することにした。其名人と稱する婦人は年齢三十二三
切髪で被布を着た風體賤しからぬ女てまづ病人の容體、年齢等を聞き、
儲神棚に燈明を點じて一對の幣を作り其幣を持ちて病人の身體を拂ひ、
祝詞を唱へ猶何か呪文を唱ふる中に一日前に伏して起き直り、今度は別
人の如き嚴な句調にて曰、此の屋内の西北の方に無縁の佛がある數十年

來香華の一つも手向て呉れる者がない夫故浮び兼ねて今女將の身體に憑けり、此佛は由緒ある佛で有る故に屋敷内に祭つて毎月十八日香華を手向けて供養する時は女將の體を立ち退きて嬉しく成佛をすと云ひ終りて、彼の婦人は夢より醒めたる如き有様であつた、其翌日床を離して床下を探查するに不思議にも一箇の石碑を發見したり、文字は磨滅して見分難かりしが之を屋外に出して小き祠を造り彼の婦人の言つた通りに供養を行ふた、所が不思議にも女將の病氣は其後日ならずして全快するを得た、其翌日他の雇人共が皆一身上の事或は既に死亡せる親兄弟の事、または未來の事などに就いて吉凶等を占斷して貰つた百發百中と云ふ方て非常に有難がつて居たのである。梓神子も唯形式に相違があるのみで同一なものと見てよろしい、其他の降神術も先づ以て同一と見て差支はない。

然らば彼等が能く幽冥界のことを知り未來の事を豫言するに確に適中

する、これは何故であるか、其理たるや決して鬼神惡魔の人身に憑附して然るにあらず、又電氣エーテル等の媒介によりて起るにも非ず全く其人の精神上の作用によるものたるや疑ふべからず、其精神上の状態は之を詳にし難しと雖も想ふに一小部分に頗る鋭敏なる處ありて能く他人の感知すべからざることを感じ他人の思考すべからざることを考へ常人の及ばざることを行ふものなるは蓋し疑ふべからず且つ彼等は精神一點に聚合して他の部分に精神力を滅するにより外面より之を見れば凡人にも劣れる愚鈍者の如くなるものならん是獨り巫女に於て然るに非ず、總て深く一事に熱心し一技に練達したるものは一見凡人に劣るが如きを常とす、例へば圍碁の妙手、音樂の妙手の如き皆一點に精神を凝聚するより外貌はやゝ愚鈍に似たるものあり今巫女に於ても之と同一理由にして外貌の愚鈍なるに拘らず感覺及思想上に一部の特絶なる點あり、是によりて斯る不思議の作用を現はすなるべし、是心理學の講究によりて疑ふべ

▲自己暗示の技

▲歐米に於ける降神術

▲羅馬法王と降神術

からざる事實なりとする論者がある。

然り、斯種の術者には感覺及び思想上に一部の常人に特絶せる點のあ
るは事實である、が、予は其特絶せる性格の働の外に催眠術上の自己暗
示の發動によるもので有ると斷言するを憚らないのである。

歐洲大陸に於て降神術が實際に行はれ得るものと確信せられたのは紀
元以前の事である、紀元以後に至つて人と鬼人との交通説が盛に行はれ
た、斯種の事を禁令すべき地位に在る羅馬法王の中でもベネソクト九世
グレゴリー六世、クレゴリー七世の如き竊に之を行つた、中古に於ては
伊太利のシオルダノ、フルーノの著「カンテライオ」に生靈死靈會合の媒
介をなしたることを記述してある、佛國に於ても斯種の記録は少くない
諸近代に於ける歐米の降神術は如何にと云ふに、一時衰頽の兆を呈して
居たが今を去ること六十年以前合衆國の美以教會の或信徒の宅で突然家
具が動き出した、又夜中に人の目に見へぬ手が子女の身體を撫てさすつ

▲佛國巴里に於ける降神術大會

たと云ふことが動機となつて其信徒の末女「ケサリン」と云ふ者が降神術
師となつて神靈に吉凶禍福を問ふの術を得た、この一事は非常の勢力を
以て英國に普及し延いて獨乙、露西亞、佛蘭西等に傳播して此術の行は
れざる所の無に至つたのである、今より二十年前西曆千八百八十九年佛
國巴里に於て第二回降神術大會が催ふされた、當時各國から出席した代
表者が五百名で之を選擧した各國の降神術會員は實に一千五百萬人に達
して居たと云ふことである、其盛んなるを想ふべしだ、而して、之を信
奉して居た人物が偉大なる勢力を持った英雄、學者の多いには實に快心に
堪へないのである、其二三を擧ぐれば

拿破崙三世 グラントストン (英國自由黨總理)

リンコロン (米國大統領) ロンプロソ (伊太利有名なる刑事人類學者)

ナンダル (英國物理學者) フムボルト (獨乙博物學者)

オーガスト、デ、モーガン (倫敦數學會長)

▲歐米に於ける降神術の方法

▲音響に神意を知らるる

ウイクトル、ユーゴ (佛國有名なる小説家)

猶其他哲學、數學、天文學を初め各種の學者、文士、醫師、新聞記者、政治家、外交家等枚舉に暇がない。

歐米に於ける降神術の盛大なることは前項に述べた通りであるが、其降神術の方法は如何なる様子であるかと云ふことを説明する必要がある。

(一) 音響によつて神靈の意を知る

被術者の望によつて神靈が卓子其他の物に音響を發し其音響によりて神靈の意を解釋する、例之或音が一ツする時はAと定め二ツする時はBと定むるが如し

(二) 降神術師の口を借りて神靈の意を知る

此場合は日本の稻荷降神と違はない降神術師が神靈に代りて被術者の問に答へるのである、其言語の如きは平素降神術師の解せざる外國語にて問ふ場合がありても其外國語にてスラスラと應答をすると

の事である

(三) 筆記にて神靈の意を知らしむる事

被術者に鉛筆と紙を持たしめるときは其手が自然に震へ出して無意識に神靈の意を認むるのである

(四) 卓子を自働せしむ

是はテーブル、ダイニングと云ふ之に使用する卓子は會衆(多人數の時に行ふ)の選擇に任せ仕掛の有無を檢査したる上之にて宜しと決定したる時は會衆は降神術師と打混りて各自拇指と拇指とを相接し又左右の小指は左右に居る人の小指と相接せしめ斯く人々の間を連鎖し且つ各自の手を軽く少しく卓端に觸れしむ、斯の如くにして稍時間を経過する時は卓子は自然にドン〜と音をさして動き出す、此時降神術師の注意の許に觸れたる手を卓子より離ちて卓子との連鎖を絶つとも卓子は依然動きて上下左右に運動をなし又は甲の場

所より乙の場所に轉じ復び甲の場所に返る。

(五)家具の自働すること

テーブル、ダーニングに次で家具も亦運動を始むる例へば椅子が跳り初むれば柱時計が降りて来て美人の膝に止まり箆箆戸棚の如き重量あるものが跳り上つて天井に接し十分間も十五分間も其位地を保つて恰も百鬼夜行の趣を呈する

(六)戸障子の如き建物が自ら開閉する

戸障子が自ら開閉するのみならず錠のおろしてある箆箆の類が何所も損せず自然に開いて中の衣類が甲の抽斗から乙の抽斗に移轉しまた再び元の所に歸る

(七)輕重寒暖の變更

重きものが羽毛の如く輕くなりて兒童もよく運搬し得れば小さくて輕きものが、非常に重くなり四五名の壯夫も動かすことが出来なく

なる又或物品が手を觸るゝ能はざる様に熱くなるかと思へば或物品は同じく冷たくなる

(八)音樂が自然に聞ゆる

若し室内に樂器があれば夫が自然に調子よく鳴る、樂器のない時は空中或は壁、または天井などから音樂が聞ゆる

(九)屋鳴り震動する

前項の音樂が止むと忽ち雷鳴の如き響が聞へて地震の如く家屋が動揺する

(十)五光を發して中空に揚り高窓から出入をする

前項の屋鳴が止むと燈火が消へて八方から五色の五光が差しこむ忽ちの間に降神術師の身體が巨人となり又矮人となり五光を放つて中空に舞揚る、頭部が天井に接するかと思へば高所にある窓から屋外へ出て甲の窓より乙の窓へ移りて何回となく出入する

以上の如きもので有る歐米の降神は我國の降神と同一な(一項より三項まで)ものも有るが又、四項以下の如く或一種の慰み半分に試むる不可思議の現象もあるのである、之等を玩味する時は益々予の催眠學説が確定するのである。

前項述べ來つた通り歐米の降神術は眞面目に身の上に吉凶禍福を諮詢するのと面白半分には不思議の現象を演ずるのと二種類に分れて居るが我國の降神術は總て眞面目で在る、これは日本人の神に對する信念の然らしむる所で其神に對す信念の厚き我日本人は降神術に依つて如何なる事實を残して居るか此問題を考究するは獨り降神術の上のみならず國民の性格を知る上に就いて實に興味のある事である、抑も我上古の政體を按ずる時は神靈の意に隨つて政治を行ふと云ふことが神武天皇以來歴朝の御主意で所謂政教一致であつた故に降神術の發達は治國の上よりも之を助くるの進命を持つて居た戦場の進退の如きも或一種の降神術によつて

▲日本の降神術

▲國民性との關係

▲降神術の進退と

士氣を勵ましたる事實は往々にある、が、降神術を以て我歴史を飾りたる著大なる事實は官幣大社男山八幡宮の遷座である、我帝國第二の宗廟として伊勢神宮に並ぎ長くも歴代天皇の御尊信淺からず大江匡房をして「昔は萬乘の君、今は百主の祖なり、一天の下其德輝を戴き四海の中其恩澤に霑ふ」と敬稱せしめたる男山八幡宮は大和國大安寺の僧行教と云ふ者貞觀元年四月十五日宇佐八幡宮に詣て、一夏九旬の間參籠し、大般若經を轉讀し神靈に奏して曰く桓武天皇都を平安に遷させ給ひてより爰に五十餘年未だ鳳輦を守護すべき神なし願くば神慮我に降つて守護の神を教へよと同七月十五日夜半太神の神靈行教に降神して曰く「吾汝が修善に感ず、依て鳳輦の近くに移坐し國家を鎮護せん」と行教之を京師に伏奏し山崎離宮(當時河陽離宮と云ふ現今の山崎停車場の前)に來り再び神靈の降神を請ひて遷坐の地位を諮詢し現今の男山に勸請すとある。これは降神術の著大なる事實である、當時は僧侶の間に此術の流行を來し未

▲僧行教と降神術

▲日本の
降神術
は上古
より真
面目

來の吉凶を占ひたるが近世に至りて前述の如く稻荷降し、梓神子、口寄等の流行を見るに至つたのである、我國の降神術は上古より眞面目に人生の運命を占斷する眞面目の方面に發達して今日に至れるもの、而して斯術は或一派の學者の唱ふるが如き一顧の價なきものか將た實際に於て其効果を現はし得るものか其證明は實驗に徴せば明瞭である。

(三) 仙術

仙術とは、人間界の慾情を去りて、神仙の幽境に寓し、難行苦行によつて、心神を修練したる仙人が、強烈なる自信と、偉大なる自己暗示の力によりて、理法を以て解釋すべからざる、奇異の現象を演ずるの術である、故に仙人が此術を修業せんが爲には、自ら人間の境遇を脱して、山林幽谷に獨栖し、霞を吸ひ露を餐して難行苦行、以て心身を修練したものである、併し茲に斷つて置きたいのは、仙術は必ず古來仙人の修業

▲仙術は
容易に
得實行し

▲仙術の
字義

▲仙人も
人間で
ある

した如き、人間界を解脱して米穀火食を絶ち、苦行したる結果でなくては、出来ぬかと云ふ疑問に對する解決である、が、仙術其者は斯る困難の結果によらずとも容易に實行し得らるゝ事は、次項の實驗法方によりても明かなることである、前に掲げたる定義は古來仙人のなしたる仙術を云ひ現はしたるもので、釋名と云ふ書に「老而不死曰仙、仙人山故其字人傍山也」と、又書言故事に「神仙化去曰尸解、足不青、皮不皺、目光不毀、不失其形骨者皆尸解也」とあるに見るも、山に入りて業を修むると云ふことは、古來仙人の條件で有つたらしく思ふ、這の難行苦行の結果仙術てふ不可思議なる方術を行ひ得るのみならず、俗體神仙と化して、所謂童顏鶴髮、不老長生の境涯に解脱する、彼の仙境の語は之に基いたのである。

仙家と云ひ仙人と稱するも、本來は人間である、人間であるが故に、難行耐持の修業の厚薄、自信力の強弱其他の條件によりて、其行ふ所の仙

術に巧拙のあるのは當然の理である、去れば、仙人其者に對して階級を來すことも亦理の當然と謂はねばならぬ、其階級の種類の如きも人によりて見る所を異にし、隨つて其名稱も確定して居らぬ、茲には暫らく「廣博志」の分類と其名稱によりて、其階級を置くことにする、曰、九天眞天、三大眞王、太上眞人、飛天眞人、靈人、飛仙、僊人の七級に分ちて有る、之等の階級に在つた仙人が、演じたる仙術其者の種類も、又實に非常なもので、一一記述することは、到底繁雜に堪へられない、一例を擧ぐれば、現に一昨年來、東京及大阪等に於て、奇異の仙術を公衆の面前に於て、屢實驗し、帝國大學に於ける實驗を初め、一般の心胆を奪ひたる、彼の有名な藝の源七翁の所謂仙術すら、其奇法の數が澤山あつたではないか、而も源七仙人は仙家の階級に於ては、最も下級に居るべき筈である、未だ雲に乗つて大空を翔るの奧義には達して居ない、云はゞ仙人の子供である、其堂奥に達したる上級仙人の演じたる仙術に至つて

は蓋し思ひ半ばに過ぐるものがある、故に茲には古來史籍に散見する著名の仙術二三を捕へて、仙術の何物なるかを示すに止め、猶實驗法の條に於て補述することにする。

「龍に乗りて大空を翔る」天平年間大和國生駒山の頂から、青油笠と云ふ青色の笠を冠つた仙人が、龍に乗つて大空を飛行した、其速きこと奔馬の如しと云ふことが國史に見ゆる、當時は我國に於て、最も仙術の流行したる時代であつて、仙家仙人の數も多かつたと口碑に傳はつて居る。「白石を叱して羊と化す」之は支那に於ける仙術家即ち仙人の事跡である、黃初平と云ふ羊を牧する童子が有つた、或時一人の道士即ち仙人來り、彼の性質の謹直なるを認めて、金華山の石室に伴ひ、四十餘年の間其道士に師事して郷貫の事を忘るゝに至つた、初平の兄初起、彼の行術不明なるを嘆いて、所在を尋ねたれども知れず、或時市中にて一人の道士に會じ、弟の行術を尋ねた、道士の曰、金華山の石室に一人の牧童が居

る、名を初平姓を黃と呼ぶ、汝の尋ぬる者或はそれかと、初起悦びて其道士に随つて石室に至り、初平に逢ひて積る漸をなしたる末、牧して居た羊は如何したかと聞いた、初平曰、東山に在るを以て行いて見られよと、即ち東山に行きて見た所、東山には白石の累々として轉がつて居るのみで、一疋も羊は居ない、初起不審に思ひて初平を顧ると初平頷いて彼の白石を叱した、所が不審議や、其累々たる白石皆起ちて數萬の羊となつた、之は有名な漸である。

八十の老翁壯者となる」是も支那に於ける事跡である、王老と云ふ者或田舎に住居して居た、或日一人の老道士即ち仙人來りて三旬あまり滞在して居た、道士滞在中に編身瘡瘍を發した、道士王老に乞ふて酒數斛を整へ、二日間其酒中に身を浸し、出て來る所を見ると驚くべし、昨日までの老體は疾病の全治せるのみならず、鬚髮共に漆の如く、顔は童顔となりて、全く壯者を凌ぐ者と成つて居た、道士王老に教へて曰、此酒を

八十の老翁壯者とならる

飲めば、仙人となりて中空を飛行すること自在なりと、時に王老の一家麥秋の最中で、妻子と共に麥を打つて居たが、一同教へらる、儘に其酒を飲み、暫らくすると忽ち風起り雲來り、王老の一家族飄々として輕く中空に登り、空中で相變らず麥を打つの音が聞へたとある。

以上は其一例を揚げたるに留る、「酒を吹いて火を救ひ」「雪を削りて銀となし」「地脈を縮めて千里の遠きを尺地となす」等の事は、孰れも史上に散見する事實である、猶例を現代に求むれば、彼の源七仙人が、物凄きまで沸騰せる熱湯に手を入れて、平氣なる、夏尙寒き三尺の秋水の鋭き双先を握り、振り舞はして傷付かざる、銳利なる刀劍を梯子に組み、其上を素足にて上下する、又は炎々たる烈火の中に足を投じて少しの火傷を爲さざる等の奇術は、多數の認めたる事實である、而して、之等奇異の現象は、到底爲し得べからざる事として、排斥する學者が有る、之等の論客は催眠術の何者かと云ふことを知悉しない偏見の説であつて、特

催眠術を知る

更に辯明する必要はない。

支那に於て仙化したる者の中に、有名なものは、大行山に入り青泥を服して仙術を修練したる王烈を初め、常に松實を服して能く空中を飛行したる偃僮、(この仙者は齡三百に達したとある)及び晋の世に惠州の大守で有つて、羅浮山 水簾洞で其術を修めたる黃真人、紫陽真人が蒙山で逢ふたと云ふ羨門子、費長房が見たりと云ふ壺公を初めとし、葛洪、劉向など枚擧に暇のない程であるが、借日本に於ける仙人は如何かと云ふに、日本も又決して支那に譲るものではない、方道仙人を初め、久米仙人、喜撰法師を初め本朝列仙傳に名を留めて居るもののみでも少くない、が、茲に日本仙人の代表者として久米仙人と喜撰法師の二仙を掲げて日本の仙人の状態を詳にしよう、併し喜撰法師の事跡は記録の徴すべきものが少ない、元亨釋書に「窺仙居宇治、持密呪、兼求長生、辟穀服餌、一旦乘雲去」とある、法師は桓武天皇の後裔であつて山城國宇治郡宇治

山に住して居た、勅を奉じて和歌式を撰したる有名の歌人であつた「我庵は都の巽鹿ぞすむ世を宇治山と人はいふなり」の和歌によりて三尺の童子も能く知る所、宇治山には今尙其古趾がある、つまり喜撰法師は風光明眉なる宇治山に仙居して、其術を修め、遂に雲に乗つて仙化し終つたのである。

久米仙人は、女の脛の白きを見て通を失ひ、仙界より墮落したと云ふ傳説を傳へられて居るが、恐らくこれは後人附會の訛傳である、現に伏見御香宮の本殿に、白菊神社として祀き祭つて有る、果して墮落したものがなれば、後人の崇拜を受くる道理がない、猶御香宮の一の鳥居の側に、仙人の意が天に通じ、天より降つたと云ふ白菊の石がある、其石の側に東久世通禧伯の「仙人の昔の跡は白菊の千代のかほりに残りけるかな」と云ふ和歌を刻したる碑面がある、久米仙人は元慶元年に叡山に登り、空日と云ふ人を師として、天台の學を修め中々の天敏であつて、僅

十一歳の時、止観、法華の諸學に明通して、中年には餘程の勢力を有する僧侶であつて、名を陽勝と號して居た、叡山を降つて伏見久米寺に住職して居たが、後に桃山の北の大龜谷に仙居して、米粟の火食を斷ち、白菊の花を食して仙術を修めた、白菊神社の神號は之から起つたのである、延喜元年の秋世を謝したが、これは死んだのではない、只世を離れたのであるとの説もある、仙人に就いて面白き事は、仙人仙化を思ひたつた時、平常身に着けて居た袈裟を松の木に懸け、其袈裟に堂原寺の延命に與ふと書いて置いた、延命之を見て悲しみ、仙人の跡を求めたが遂に得ることが出来なかつた、又仙人の父も、其行衛不明を嘆いて、我に子供は多いが陽勝が一番可愛い、陽勝は仙術を得て居ると云ふが、將して仙術を得て居るなれば、我悲嘆は知つて居るであろう、願くば一度來りて其顔を見せよと悲鳴した、仙人之を知覺して、父の屋上に來り、法華經を讀誦して居た、父其聲を聞き付けて、見たれども更に人のけは

▲日行天
降地の
大自在

いがない、讀經の聲は依然として聞へて居る、其時仙人の聲として、我は人間の境を脱して仙界に在り、考思違はず、故に來りて經を讀む、毎月十八日には香を焚き、花を獻ぜられよ、我之を尋ねて來りて讀經をなし、恩を報じまつらんと言葉終りて讀經の聲は止みたとのことである、後仙居の北方、金峰山に於て舊知に遇ひ、我仙境に在ること五十年、今や八十歳なり仙術を修めて心身自在を得、天上に上り地下に入る、無碍なりと云ひたりと傳ふ

(四) 忍術

忍術は隱身術、隱形術又は遁形の術とも唱へて、自己の身體を隠し他人の目に觸れしめざる様にする術で、即ち他人の家へ忍び入るとか、又は自分の身形が他人に見へては悪し、と云ふ如き場合に、此術を行ふて以て身體を隠す實に調法なる方術である、斯術の我國へ傳へられたのは

其時代が詳でないが、徳川幕府の頃には、頗る流行を極めたもので、幕府を初め、諸國の大名が、争ふて、此術者を抱へた、當時この術者を忍者、伊賀衆、甲賀者など、稱して居つた、大平記に阿新丸が父の仇、本間三郎を殺せし條に、「まづ本間三郎が寢所を見るに、血流れたり、こはいかにと憤つて、細人ありて、三郎殿を害し奉りたり云々」の記事あるに見るも南北朝以前に傳來したと云ふことは、争ふべからざる事實である、近來忍術を論ずる者は斯術の傳來をキリシマンパレンの一派が布教上の手段として傳へた如くに唱ふるものがある、之は笑ふべき事である、元來忍術は其起源を印度の行者より發したもので、印度に於て耶蘇紀元前既に充分の發達を遂げて居たのである、支那では左傳の註に游偵、諜者、細作等の忍術の名稱が見へて居るに考ふるも、唐時代に之亦充分の發達を遂げて居たことが分る、漢の時代に至りて解奴、辜形貂の二名人を出した、此兩人は平生の出入にも門戸に由らず故に門戸が鎖されて

居ても何れかより故障なく出入したと稱せられて實に忍術の中興の祖と仰がれて居た、介象、左慈、干吉、孟欽、羅公、張果及び女巫章丹、陳琳等の徒は右二者の流を酌んだもので、これまた當時神仙と賞嘆せられて居た、而して、支那で行はれたる忍術即ち遁形の術には、五つの方法があつた、金遁、木遁、水遁、火遁、土遁、と稱する、即ち術者が木、火、土、金、水、孰れかの一を得れば、直ちに身を隠して所在を失ふのである、大明に令謙と云ふ忍術家があつて字を啓敬と云ふた、或時人を導きて政府の倉庫に忍び入つたが、事を遂げずして發はれ、逮へられて訊問所に引かれた、即ち令謙は捕史に向つて飲を求め、捕史乞を容れて瓶に水を入れて彼に與へた彼は即ち跳つて其瓶の中に入り、體形を隠し終つた捕史驚いて瓶を破壊した所、瓶の片々皆應を發して捕史をして奇異に驚かしめ、而して竟に彼の所在を知ることは出来なかつた、之は即ち水遁の術である、又正徳年中一賊を捕へたこの賊も忍術に長じたるもの

て、一掬の土を手にはると見る瞬間に其姿を消して所在を失ふたとある之は即ち土遁の術で、以上は支那に於ける忍術の一斑と忍術の方法の一端を窺ふたものであるが、偕支那の忍術は其起原を何處に發したかと云ふに、記録の徴すべきものはない、然れども天竺即印度より傳來したと云ふことは疑ふべからざる事實であるらしい、印度に於ては早くより行者と稱する者が仙術及びこの忍術を行ふたもので、後に佛教の傳布と共に、支那及我邦へ傳はつたものである、有名なる高僧龍樹菩薩未だ佛道の奥を窺はざる二十歳の頃、五天竺を巡行して諸梵志の四章陀典及其他の諸道術等を究め、三人の同氣の友と共に、身を隠すの術即ち忍術を學びて、王宮に忍び自由に入出入して姪樂の榮華を極めんと相談して、打連れて忍術師の門を訪ひ、其秘法を受けた其後三人相伴ふて王城に出懸けて苦もなく諸門を通過し女官の室に忍び入つた、元より姿の見へぬ事故誰一人咎むるものはない、心まかせに后女官の房々に到り官中の美人を

悉く犯して色慾快樂の邪道に耽つた、其後宮中の女官達、懷妊するもの多く、懷妊者自身は孰れも其譯を知らず只管愧ぢおそれて居たが、偕斯くあるべきにも非ずで、種々評議の上旨を王に奏するに至つた、王驚いて叡知の臣下にこの不祥の詮議をせしめた、其時一人の老臣奏すらく、斯る奇怪の事に二種あり、一は鬼魅魍魎、狐狸の所爲、一は方術の禍であつて、此度の事は忍術を以て斯る奇怪の所業に及びたるのであらうと、即ち白砂を庭上に布きて其足跡を驗することになつた、其結果は案に違はず四人の足跡を認め得たにより、愈々曲者ごさんなれとて、勇臣許多宮中に走せ入り、劍を揮ふて的を定めず、上下左右縦横無盡に限々残らず切つて廻つた、即時三人は切り殺されて、忽ち身形を現はしたが、龍樹も危害身に迫つて、アハヤ一刀の許に切り立てられんとしたが、其頼才は王の側に在れば安全なることを知りて、王の身邊に寄りそひ、遂に劍難を免がれて、姪樂是苦の大悟を得たとは、菩薩の傳記中に於ける有

名な逸話である。

以上の事實に據る時は支那及印度の忍術は中古以前に於て非常なる發達の域に達して居たことを想像せらるゝされば日本の忍術は支那及び印度の忍術が傳來して、鎌倉時代に發達の芽を生じ、徳川時代に之を大成したものと見て差間がない、前述の如く徳川幕府時代の忍術は徳川氏が三百の諸侯を統御する上に就て政治上高等探偵の用に使用したのである例之ば或諸侯に不穩の企が有りはせずやとの疑を生じた場合には伊賀衆即忍術者を其諸侯の邸に忍せて、日常の動靜を探知せしめたのである、是を普通の方法によつて探偵するのは非常の苦心を要するが、忍術によつて之を探るは實に容易である、即ち術者は身體を隠して探知すべき目的の者のそばに在つて、始終之を監視して居るから、随つて功を奏するところが著しい、故に幕府は大に斯術の研究を奨励したものである、原よりこの忍術が諸侯の方面に傳播することになつては反つて反對の結果を來

すと云ふ所から、この研究を非常の秘密に附して居たことは事實である而し斯る便利なる方術は到底幕府専用のもつと爲すことは不可能であるさればこそ諸侯の側に於ても幕府に秘して斯道の達人を召抱へ、また之を奨励したものだ美濃大垣藩の如きは別にこの忍術を行ふ者を一町に集めて幕府の伊賀衆と云ふのに對して栗屋町と稱して居た蓋し「いが」と云ふことを粟に隠したのである、斯の如き勢ひで諸侯が密かに斯道の研究を奨励した結果、由井正雪、森宗意軒などの達人が現はるゝに至つたのである。

歴史的に見たる忍術は上述の通りで、又忍術其物の事實は前に述べたる例によつて明に了解せらるゝてある、然るに斯る奇怪なる方術が實際に於て出來得るか否やと云ふ問題は何人も疑ふであらうが要は催眠學上の範圍に出てないのである、演劇で誰れも知つてゐる「伽羅名木仙先代萩」の床下の場で、本名は原田甲斐だが芝居では仁木彌正が大きな鼠に

なつて連判状の一卷をくはいて床下から飛び出すと、男之助が大喝して「己れも只の鼠ぢやあるめーえ、この鐵扇をくらわぬうち、消えてなくなれ溝鼠」と立廻りがあつて鼠が消えると、どろくで彈正が花道の七三から現はれるのだ。が、この「先代萩」も仁木彈正の忍術が骨子になつて仕組まれてゐるのである。それから口碑に傳へられてゐる。

石川や濱のまさごはつくとともに

世にぬす人のたねはつきまじ

と妙な一首をヌタクつて刑場の露と消えたといふ盜賊の頭梁石川五右衛門なども忍術の達人であつたのである。一體、盜賊はすべて人の虚を窺ふものであるから、盜賊の大立者になると自然この忍術に達してゐたものとみえる、また、當世でも稻妻小僧とか針金強盜とかいふ強賊が、永い間その筋の眼をくらし、姿をかくして巧みに天網を免れてゐたなどは、やはり忍術の一種に長じてゐたのかも知れぬ之れを要するに忍術と

は一種の幻覺を起さしむる方法で、其巧拙は其人々の修養如何によつて異なるものであることは云ふまでもないが、催眠術を研究すれば容易に實行し得らるゝものである、尙幻覺を起さしむる方法及原理は本書の末尾にある。

(五) 見神術

見神術とは文字に現れたる通り神を見るの術である然らば神と云ふものは果して存在するものか如何にと云ふことが先決問題になる故に神の存否を決するのは大なる問題である然れ共之を解決することは本著の目的ではない茲に神と稱するは信仰上より來る人間以上の或者即ち八幡、稻荷、不動、觀音の如き神靈を指すのである、又茲に一の疑問が起るそ

は神靈てふものは將して人間に現はるゝ如き形の存在するものか否やと云ふ疑念であるこの疑念もまた茲に解決を下すの必要はない兎に角信仰する所の神體或は佛體に就きて信仰者の嘗て實見したる木像或は繪畫若くは其他智識の資料によつて想像する所の形體が主觀的又は客觀的に現出する如く見神術は即ち斯る神靈に見る所の方術である、この方術も降神術と同じく二種の方法がある一は己自身が神靈を自在に見る法と一は他人をして望む所の神靈に接せしむるの二つである。

世には斯る現象を排斥する論者がある斯る論者は多くは唯物論を信仰する一派のものであつて予は斯種の論者に向つて人間の精神は如何なる程度までに作用するものか又た催眠術の精神上に及ぼす關係は如何なる點にまで効果を見るかと云ふことを提議したのである、論より證據我歴史の數頁を開けば古來英雄或は高僧等が崇高なる神靈に接して託宣神告を得たることが多いではないか、彼の三ヶ峰に示現したる稻荷神社の

如き、または降神術の項に述べたる宇佐八幡宮の示現の如き覆ふべからざる事實ではないか、猶ほ佛體の示現に就きては各所に散在する寺院の縁起に見よ、佛體示現の奇瑞なきものは稀ではないか井上博士は託宣神告に就いて左の通り説明せられて居る、託宣神告は耶蘇教の如き有神教に於て一般に唱導する所にして吾人若し神を信ずること厚ければ其心上に神の託宣あり或は神に接見して其命令を聞き或は夢に神の示現ありて其示教を受け或は突然託宣を感じることありと云ふ是等の事實を説明せんに固より物理的に及ぶ限りにあらずと雖も心理的よりする時は之を説明することを得べし、蓋し吾人の精神にして神を信ずるの一點に聚り其點に思想の專制を惹起するときは或は幻覺妄覺を生じ神の體を顯現し或は偶然に神の託宣を感じることあるは自然の結果なりされども斯の如き現象は是眞に神ありて然らしむるに非ず全く心其物の作す所なりとす右はこれ心理的説明なれども更に進みて其理を推究するときには爰にも亦

理想的説明を用ひざるべからず此説明に據るときは吾人の心の本體即ち無限絶對の境遇よりして吾人の精神上に感動を及ぼすことあり是託宣神告の起る所以なりとす然れども其絶對の體は耶蘇教にて唱ふるが如き物心以外に獨存する神にあらずして其體は吾心と相通じ又吾心の本體たるものなれば其本體の發動は之を吾心面にて感受し得べきこと看易き理なり若し然らずして耶蘇教の立つるが如き神を以てせば決して之を説明すべからず是に於て理想的説明に據るときは佛敎にて立つる所の眞如説に依らざるべからず」また英國の有名なる科學家ウヰリアム、クルツクス氏は神に接するが如き或は降神的現象の如きを以て自然の法則に反けるものとなし之を排せる説に對して以下の如き説を立て居る彼等の所謂自然の法則なるものは總に不完全なる人類の心目に映ずる狭き範圍内に就て設けし法則にして眞個自然の法則の範圍は幾倍なるや知るべからずさるによつて彼等が所謂自然の法則に背くとは徒だ此狭き範圍内に行は

る、自然の法則に背くの義にして眞個自然の法則に背くとは決して言ひ難いのである。抑も人類の智識には限ありて身體的の點に於て智識の範圍外のもの多ければ其所謂不思議の力なるものも其力を知覺するに必要なる能力が吾人に缺乏せる故に不審識の力と思考し背理的のものと思考するものである」

以上の兩説によりても神靈に見へ神靈に感接すると云ふことは爲し得べきことであつてまた相當の價値のあることと有ると云ふことは認めらるゝ獨りこの二説のみならず古來我邦に於ける歴史上の事實が充分に證明して居る。

最近我が思想界に多大なる貢獻を與へて世を去つた綱島梁川氏は最も冷靜なる態度に於いてまた最も眞摯なる所論とによつて、「予は明かに神を見たり」と云つてゐたのである。綱島氏は世の多くの思想家、哲學者、宗教家等から批難され攻撃されたにも拘らず、堅く自己の信念を執つて

動かず、「予が神を見たるは飽く迄も事實なり」と稱して再び三たび「見神の實驗」を説いて已まなかつた。綱島氏はその時、書齋の机に倚つて何かの原稿を書いてゐた、夜は十時を過ぎ十一時に近くなつた、静かに更くる夜は昔しながらの武藏野を忍ばしめる、綱島氏のやうな神祕的傾向の人が「詩よりして神に行き、神に行きて詩を見る」といふ風を冥想に耽るには適當な静な夜であつた。弧燈の下に筆を駈つてゐた氏は忽然として机上も書齋も吾が手も筆も紙も一道の光明に包まれて、あたり一面に輝きわたる光彩に接した、そして神が氏に見れたのであつた。その間が實に十五分間も續いたと氏自らいつてゐたのである。若しこの見神論が綱島氏の如き學識と人格をもつた人から提供された問題でなかつたら世人は一顧も與へなかつたであらう。けれども綱島氏がこの不可思議なる見神説を唱へた時、當時の思想界は如何に動搖したであらうか、堂々たる宗教家などが今更らしく佛は見えるとか神は人に見えぬものだとか

大騒ぎに騒いで餘所目にも氣の毒な程狼狽を極めたものであつた。多くの學生等が相率ゐて基督信者になつたのは當時顯著な事實である、綱島氏の一見神論が學生達に宗教思想を惹起せしめた確かな事實であつた。その上に思想界は一時に動搖して、河上肇氏の「無我の愛」とか、宮崎某氏の「メシヤ佛陀」とかその他異様な思想の波が湧きかへつた。「我は神なり」と叫ぶ人も出る、「我れは佛なり」と號する人も出た。大阪の末廣某などいふ人は「我は救世主なり」と稱して天下の大新聞紙に頗る揮つた廣告を掲載したものであつた。が、兎に角、かゝる思想界の奇現象は綱島氏の見神説に動かされて起つたといふだけを吾人は記憶すべきものと思ふ。

(六) 氣合術

氣合術は、古來我が武道中、劍道柔道の極意として重んぜられたもの

動かず、「予が神を見たるは飽く迄も事實なり」と稱して再び三たび「見神の實驗」を説いて已まなかつた。綱島氏はその時、書齋の机に倚つて何かの原稿を書いてゐた、夜は十時を過ぎ十一時に近くなつた、靜かに更くる夜は昔しながらの武藏野を忍ばしめる、綱島氏のやうな神祕的傾向の人が「詩よりして神に行き、神に行きて詩を見る」といふ夙な冥想に耽るには適當な靜な夜であつた。弧燈の下に筆を駈つてゐた氏は忽然として机上も書齋も吾が手も筆も紙も一道の光明に包まれて、あたり一面に輝きわたる光彩に接した、そして神が氏に見れたのであつた。その間が實に十五分間も續いたと氏自らいつてゐたのである。若しこの見神論が綱島氏の如き學識と人格をもつた人から提供された問題でなかつたら世人は一顧も興へなかつたであらう。けれども綱島氏がこの不可思議なる見神説を唱へた時、當時の思想界は如何に動搖したであらうか、堂々たる宗教家などが今更らしく佛は見えるとか神は人に見えぬものだとか

大騒ぎに騒いで餘所目にも氣の毒な程狼狽を極めたものであつた。多くの學生等が相率ゐて基督信者になつたのは當時顯著な事實である、綱島氏の一見神論が學生達に宗教思想を惹起せしめた確かな事實であつた。その上に思想界は一時に動搖して、河上肇氏の「無我の愛」とか、宮崎某氏の「メシヤ佛陀」とかその他異様な思想の波が湧きかへつた。「我は神なり」と叫ぶ人も出る、「我れは佛なり」と號する人も出た。大阪の末廣某などいふ人は「我は救世主なり」と稱して天下の大新聞紙に頗る揮つた廣告を掲載したものであつた。が、兎に角、かゝる思想界の奇現象は綱島氏の見神説に動かされて起つたといふだけを吾人は記憶すべきものと思ふ。

(六) 氣合術

氣合術は、古來我が武道中、劍道柔道の極意として重んぜられたもの

である、故に武道の達人は、また氣合の達人であつた、されば、劍道若くば柔道の立合に於て、氣合で勝つと云ふことが有る、例へば甲乙の二劍客が、眞劍の勝負を決するものと假定せよ、互に腰間三尺の秋水の鞘を拂つて、双方青眼に構へる眞劍と眞劍の切尖がピタと合したる時、莊重にして威勢ある一聲「エイッ」と氣合を掛ける、この一聲は、實に勝負を争ふ者の運命を決する最後の刹那である、即ち氣合術に長じたる者の一聲は、相手の頭上に絶體無限の威力を示す時である、特に斯術の奥義を極めたるもの、一聲は、最早相手を倒すに刀劍の要はないのである、此一聲の氣合にて、相手を倒し得らるゝので有る、千萬斤の威力は、相手の頭上より威壓して、所謂たちすくみにすくみて、無能の境に立ち至らしむるのである、特に柔道に於ては、斯術應用を遺憾なく發揮するのである、彼の柔道の仕合は劍道のそれと異なつて、身に寸鐵を帯びないのであるから、互に身構へると同時に、双方の視力は電光石火の如く相

手の隙を見るのである、此刹那に交換せらるゝものは、双方の氣合である、此氣合の優劣は、また勝敗の運命を決するので、古來柔道仕合に於て、特に名人の仕合に於て、身構へをすると同時に、一聲の掛聲に一方の倒れたる實例の往々記録に残りたるは、即ちこの氣合の威力に倒されたのである。

去れば、封建時代以前の人が、他人を制する力量養成に腐心したのは社會に對する自己の地位を定める上に於て、必要に迫られた結果であつて、其人を制するの道は、劍柔二道を以て最要の技藝として居つた、而してこの廣大無邊の威力ある氣合術が劍柔二道に専ら應用せられたのは、偶然ではないのである、この氣合術が自己の社會に對する運命を決すべき、最要の武道に應用したればこそ着々發達の域に進みて、塚原卜傳の如き柳生但馬守の如き、其他斯道の名人を輩出するに至つたのである、彼等が斯術を研究したる徑路は、先づ其の理を窮めて而して後其技に及

ぶと云ふ、順序に據つたものではない、當時彼等の智識は其原理を發見するまでの發達は遂げて居なかつた、彼等が斯術を研究練磨するには、陽氣の發する所金鐵亦透るてふ氣概を以て、一心不乱に、まづ精神の鍛練をなし、不識の間に斯の術を極めたものである、人間の熱誠と云ふものは實に恐ろしきものにて、斯道の名人達人と稱せられて其奧義に通じたるものは斯術を以て人間以外他の動物にまで應用し得らるゝに至つたのである、彼の塚原ト傳が奔逸せる悍馬を一聲の氣合にて止めたるが如き、また梁上にある鼠を氣合にて落したると云ふが如き、其他種々の逸話の今日に残りたるものも少くない、取り分け有名なる嘶は柳生飛彈守が、猛虎を取拉いだ逸話である、二代將軍家光が飛彈守の武力を試みんとて、將軍家に養はれたる猛虎との仕合を命じたのである、飛彈の守は三尺棒を持ちて、獠惡極まる虎の柵の中に入り、彼の棒を青眼にかまへて、一聲嚴なる氣合を掛けた虎はこの一聲の氣合の威嚴に打たれて、猫

の如くに縮みあがり、飛彈守と凝視し得なかつたと云ふことである、されば、この氣合術は獨り人間のみならず、他動物にも應用し得らるゝことは、以上歴史の事實が充分證明して居るのである。静中に動ありと云ふことが有るが、由來活動と云ふことは、不動の中に生じるのである、前述の劍柔二道に於ける氣合の奧秘も、また實に此に在るので、劍客が双方刃を合して互に睨み合ふたる刹那は、即ち不動の形である、柔道家が二勇互に姿勢を正して相對したる刹那も、亦同じく不動の形である、斯の互に不動の姿勢を取りたる瞬間に於て掛けたる「エイツ」の一聲、即ち氣合なるものは、静中より動を現はす發端であつて、この掛聲の威勢如何か、來るべき活動の強弱を示すもので、其威力の強き者は活動に餘猶を示す、弱きものは即ち非常なる壓迫を受けて、所謂呑まれて仕舞ふのである、言葉を替へて云ふ時は機先を制せられるのである、これは獨り武道には限らない、圍碁の對局に於ても又は其他

輸贏を争ふ場合に於ても、同斷である、即ち「氣で勝つ」と云ふことがこの應用に外ならぬので、殊に論談の場合は、この應用が最も肝要である。最初の一聲にて敵の争鋒を挫けば、即ち其論戰は既に勝利に歸したる譯で、外交家の機先を制するに苦心するのはこの理である、爰に斷つて置くことは、氣合なるものは必ずしも「エイツ」の掛聲に一定したものではない、時に臨み事に應じて、聲其物に一種の威力を示すのである、又場合に依りては、無言の氣合もある、無言の氣合とは確乎不動の心胆を指すので、所謂不動の精神である、禪宗に於ける參禪の修行は全く不動心を鍛練するにあるから、參禪の功を積んだる禪僧には劍客も打ち込むことが出来ないと云ふは、取りも直さず無言の氣合に呑まれるのである、昔柳生但馬守が眞劍を以て如意を構へたる澤庵和尚に對し、流石の名人も打込むことが出来なかつたと云ふ癖がある、左もあるべき事だ、無言の氣合は即ち其人に犯すべからざる威嚴を備へるのである。

生存競争の劇烈なる今日に在りては、自己を保護するの策略として、人を心服せしむるの手段がなくてはならぬ、人を心服せしめ、人の機先を制すると云ふ上に於て、氣合術は等閑に付することは出来ないのである。凡そ世の中の事々物々は、何に據らず人に交渉しないものはない、人に交渉する以上は、人を制して、自己に心服せしむる即ち氣で以て人を呑むと云ふ氣概は、やがて己を優勝の地位に置くのである、故に人は何事に對しても氣合と云ふことの呼吸を忘れてはならぬ、世の中には、意氣の旺盛なる人と、意氣の悄沈せる人とがある、意氣の悄沈せるものは、物にあたつて氣合を掛くると云ふことを知らない人で、斯程の人は其爲す事に總て活氣がなく、やがては、敗者に伍する憐れなる人である、之に反して意氣の旺盛なる人は何事にも氣合を應用する人で、總ての動作に活氣がある、人に對しては人を制し、物に對しては物を制する、一例を擧ぐれば、斯程の人は臨池の業に於ても、筆を以て紙に對すれば、渾身

の氣合は筆鋒に掛りて所謂活氣充滿の文字が出来るのである、日蓮上人の如き、豊臣秀吉の如き、錢屋五兵衛の如き、山岡鐵舟の如きは、斯術の活用に妙を得て居た人である、吾人が社會に立つ以上は、氣合術の研究は到底等閑にすることが出来ないのである、斯術の研究を積み、其堂に上りたる人は、他人と應對するに際し必づ先づ對手を心服せしむるを以て自分の意見が何事にも徹底する、即ち人の心を自由に操從し得るのである、氣合術の社會競争に於ける價值また、大なりと謂ふべしだ。然り、人世に處するには氣合術の肝要なること最早云ふべき餘地を殘さない、儲この氣合術なるものは、抑も如何なる理由によりて、斯る現象を現はすか、蓋し疑問であらう、緒言に述べたる如く、人には偉大なる力を有する意識が潜在して居る、精神を鍛練して確乎不動の心を養成すれば、事に臨み時に應じて潜在せる一種の意識が活動する、この意識が對者に傳想して、不審議の現象を現はすのである、催眠學上より之

を云ふ時は、暗示術の結果に歸するのである。

(七) 讀心術

讀心術は、讀想術又は察心術とも云ふ、他人の心中に想ひ居ることを考察する方術である。凡そ人間處世の上に、讀心術程肝要なものはない之を大にして、國家外交上の掛引に於て、之を小にしては、一家日常の生活に於て、人の胸中を洞察するの技倆の有無は、直ちに其盛衰に影響を來す。日露戦役の終局に於て、小村大使とウイッテとの談判の如き、小村大使にしてウイッテの胸中を第一回の會見に於て、悉く洞察し得たらんには、總ての交渉が先手高飛車と云ふ破天荒の態度に出で、ウイッテをして、奇策を弄するの猶豫を許さなかつたであらふ、されば其講和の終局は吾人の期待より以上の大功を奏したに相違ない、之に反して、慶長十九年大阪冬の陣の終局に於て、木村長門守重成が、秀頼の命を奉

▲家康を
御破し
たる木
村重成

し、使者として徳川家康を其軍營に訪ひ、重成家康と對座するや、直ちに家康の胸中を觀破して、所謂先手高飛車の高壓手段に出て、僅か二十代の白面の若武者が、流石の狸親爺の家康にまで舌を卷かしめ、使命を全ふした、之は重成の人となりにならざるに負ふ所であらうが、また重成が家康の胸中を觀破したる、讀心術の効果に基くことは、否むべからざる事實である。一家日常の事に就いて之を云ふ時は、例へば來客のある場合に細君が茶を酌んで出る、此時細君が主人の顔色を見て、あゝ此客は厚遇せねばならぬと云ふ、主人の意を讀み得たなれば、細君は直ちに其準備に取り掛り、主人の督促を受けざる先に、主人の意の如く酒肴が運ばるゝと云ふことになる、同じ御馳走になつても、客の方では、ソレ酒を出せソレ肴を出せと、主人が一々命令して出されたものよりは、幾層倍も心持よく厚意を受けるので、其の馳走が活きてゆく譯で、主人の面目もあがる、延いて細君の技倆もあがるのである、また男子敷居を跨げば七

▲一家の
主婦の
讀心術

▲釘と云
へば幼

人の敵ありと云ふ諺がある、時に外に出て、忍ぶべからざる事をも忍び爲に快々として歸宅することはまゝある習ひであるが、此時細君が主人の胸中を讀んで、鬱氣を轉せしむると云ふ手段に出てたなれば家庭は一つの樂園となつて、笑聲外に洩るゝと云ふ幸福なる生涯が得らるゝのである、故に讀心術の心得ある細君は、氣の利いた細君で所謂良妻である一を聞いて十を知るは讀心術の効果である、釘と云へば槌と云ふ諺もあるが、一の用事を命ぜられたる時、夫の胸中を讀みて第二の用事を片付けることになれば、双方の愉快は實にたとふるものがない、世には數年同棲して、猶夫の氣心を察することの出来ない者が有る、斯る者の家庭は決して圓滿に納まつて行くものでない、夫は必ず妻の行届かざるを恨み妻は自身の不能を棚へ上げて、夫を六ヶ敷屋として怨ずる、たまゝ自身不行届を認識したるものは、密に自身の不甲斐なきを恨みて、暗涙にむせぶと云ふ實例も少くない、讀心術の心得のなき者の不幸も、また

甚だしいではないか。

上述の如く、一家庭の些事に於てすら、讀心術の肝要なることは、實に一家の盛衰にまで影響せんとするではないか、まして男子社會に立つ、斯術の肝要なることは云ふまでもない、爰に猶面白き實例がある、徳川家康が伏見城に居た時、或夜大阪の形勢只ならざるの注進があつた、侍臣本多正純其趣を家康に告んとて、家康の居間に伺候した、其時家康は正純の顔を見て、ニット笑つた、正純もまた家康の笑顔を見て心を安んじて、何事も告げずに退き其夜は枕高々と臥したと云ふことである、之は正純が家康の胸中を讀んで、我が告げんとするを家康の既に之を知りて、最早充分の成算の熟して居ることを察知したからである、意氣相投じると云ふことも、道理は同一で、双方共に心を讀み合つて、緘黙の間に意志が相通じ一致するからである、されば讀心術と云ふ處世秘訣の鍵を握つて社會に立つ時は、他人の心術を洞察して事を處するから、萬事圓

▲以心傳心

滿に進涉する、決して失敗に歸すると云ふ事はないのである。

爰に各自の職業に就いて之を述べんか、まづ商人が其店頭に来る顧客の意中を察知し得るものとせよ、店主は顧客の顔色を見て、其意中の品物を提供し、以て充分の満足を得せしむ、萬事この手段に出たなれば其商店は繁榮せざらんとするも得べけんやである、又醫師が患者に對して一々其心中を洞察し、以て診察をするときは、其醫師に對する患者の崇拜の度も加はりて、治療上に非常なる便宜と効果を收め得らるゝのである、其他辯護士の如き、或は官吏の如き、相手の心意を察して事を處したなれば、其便宜は云ふべからざるものがある、特に宗教家の如き、布教の任にあたりて人を教化せんとする場合は、猶更の事で有る、日々相接する信徒の心意を洞察して、其弱點に向ひ、親切に法を説かば、徳化は期すべきである、又宗教家が自ら率先して斯術を研究し以て信徒に其方法を教めることにしたならばどうであらう、其信徒の内には家庭上

▲布教師の肝心

に於ける夫婦の不満と云ふことはなくなるではないか、井上博士は其妖怪學講義に於て左の意見を記述してある「古來鬼人術と稱せしもの、中には、机轉術、机話術及び讀心術なるものあり、讀心術に二あり、其一是施術者が被術者の身體の一部に接觸して、其心中を察知するものと、一は施術者が全く被術者の體を離れて察知するもの是なり、先づ第一種の例を擧ぐれば、被術者をして一物を室の一隅に藏さしめ、施術者之を察知する場合は、被術者の手を取りて其室の四隅を俱に歩行し、然る後何れの部分に何物を藏し置けるかを考察するものなり、而して、其手を取りて、俱に歩行する間は、被術者をして専心一意にこの事を默想せんことを要す、中畧、精神と身體とは密接の關係を有し、精神上の變動は必ず身體上に現出するものにして、抑へんとするも抑ふることも能はず、是の故に吾人もし他人の身體に接觸して其筋肉間に呈露する變動を覺知するに至らば、何ぞ心内の變動を察知せざるの理あらんや、但し夫れ吾

人の感覺は、未だ微細の變動を識覺する力を有せざるを以て、普通の人には察知すること能はざるのみ、若し生來鋭敏なるもの、又は經驗によりて熟達せし人は、普通人の能くせざるとも察知せらるべきなり、殊に施術者が、自ら想ふ事柄に全心を注ぐときは、所謂不覺筋動を起し、筋肉か外貌上に其状態を示さざらんとするも得べからざる事に至るをや、第二種の讀心術に至りては、他人に接觸せずして察知すのものなれば、到底學術の道理を以て説明すべからざるか如し、されども若し人の外貌を以て其心内を察知する所の、所謂人相術あることを一考せば、必ずしも觸覺に由らずして、他の感覺を用ふるも、其目的を達せらるべきこと知るべし、蓋し人相術の如きは、矢はり讀心術の一種にして、而も第二種に屬するものと謂ふべし、況んや視覺或は聽覺によりて、克く人の思想を察するは、必しも人想家を待たず、世間に往々見る所にして、吾人も平生幾分か之を實行せるとや云云」然り讀心術の一部は何人も平生實

行しつゝあるのである、之は平生の脩練によつて不識々々の間に、其術の幾分を習得したのである、この平生實行しつゝある事柄の多い人が即ち女にしては前述の良妻の部に這入るのである、既に幾分を自然の練修によりて實行しつゝありとせば、其練修如何によりては、讀心術なるもの、全部即ち他人の思想を洞察し得られざる理由はないのである

(八) 火伏の術

火伏の術は古來我國に於て神道及び佛教の修驗者等に於て行はれて居た神靈妙護の術である、故に此方術は神佛の靈驗と之を行ふものゝ呪法の力とによりて火焰燃焼の力を伏せ以て火焰の本性を滅却せしむるのであると云ふ事は之に對する一般の信仰であつた、併しながら今日の科學的知識より見るときは神佛の靈現によりて其結果を來すものではなく物理學上及び心理學上より起る現象であることは識者の均しく首肯せらる

▲物理學及
心理學
より見る
火伏の術

る所であつて之を解決するには先づ其方法を知らねばならぬ依つて此所に修驗者の行ふものと神道に於て行はるゝものと二様の方式を擧げて以て其解決の資料とすることにせん。

▲修驗者
の行ふ
方法

修驗者の行ふ火伏の法にも數種の方法がある一例として松薪の火焰を伏せる法を擧げん、先づ松割木を長凡二間幅五尺高さ一尺位に積み重ね其四隅に竹を樹て繩を張りて注連を吊り修驗者は其一方に立ちて之に火を放ち呪文を唱へて九字を切る割木に全く火の移りたるを見て助手は棒を以て其熾んに焼へつゝある火をたゞきて凹凸をなからしめ火面を平坦にする其間修驗者は專念祈禱を凝らすのである祈禱終るや修驗者は跣足となりて小足にて早く(即ち油斷をせず)其火中を渉る、信者また之に従ふて渉るのである、信者が之を渉らんとするとき修驗者傍より注意を與へる曰「必ず跣足たるべし」履物を穿つべからず「疑念を起せば火傷するぞ」と信者之に従ひて少の火傷だも蒙らないのである。

神道に於ける火伏の術は之を鎮火術と稱らるゝ實例として昨年二月東京市神田區今川小路の神習教本局にて施行し諸外國の大公使を初め大公使館員及内外の紳士紳商其他三千有餘の會衆の心胆を寒むからしめた實況を揚げん、嘗て米國の哲學者ローウェル氏が來朝して我國のあらゆる神社佛閣の研究をしたことがある氏は歸國後間もなく其見聞録の一卷を公にした其書中に同教會の火伏の術には驚嘆せられたと見へて筆を極めて不審議の現象を記述してある、之が米國人の疑問と研究の材料となつて、爾來日本へ渡航する者は同教會に就いて、其方法を實驗するものが多い、外國人間には日本に於ける珍しき名物として評判になつて居る、此の日諸外國人の參觀の多いのは、是が爲である。

閑話休題神習教の火伏の術は、場所を同教本坊内二箇の門の間の庭前に設け、三間に四五間の所を丸太にて結び廻らし、四方に青竹を建て、注連繩を張り其中央に長さ三間幅一間位に木炭三十俵位を平に積み、用

意整ひて菅野中教正以下五名の神官衣冠束帶の風姿神々しく、神前にて御魂潔め祝詞等の祈禱を捧げて式の次第を奉告し、午後五時と云ふに彼の庭前に準備せる木炭に神子と稱する町内の頭達が四方八方より火を起し、六尺有餘の竹の先へ濫團扇を括りつけたるものにて盛んに煽ぎ立てるのである、三十餘俵の木炭、火焰愈々熾んとなりて紅蓮亦紅蓮、焦熱大焦熱、遙に隔りたる棧敷の參觀人さへ、其熱氣の爲に正面する能はざるに至る、此時菅野氏以下五名の神官は其周圍を巡りて鎮火法を修すること數次、熾んにもへ上れる火焰は漸次一團の火塊となる、此時菅野中教正まづ素足となり裾を褰げて火中を徒歩して渡る、次で五名の神官菅野氏に習つて涉り了る後、邦人二百餘名、外人男女三十餘名、各授けられたる神符を肌にかけて之を渡りたるが、此の熱氣をすら感じなかつたと云ふ、之を實驗したる外人及見物せる外人等孰れも首を傾けて感嘆して居た、斯くて一同涉り終りて神官更に祈禱を捧げ七時頃散會した、此

日印度王族フマール殿下は隨行員と共に機敷にて見物し、其外諸外國の大使及公使其館員、知名の外國商人等も見受けられた、之が神道に於ける火伏の術の實見談である。

俗爰に起るべき疑問は「如何なる理由によりて炎々たる烈火が熱くないか」と云ふことである、これは云ふまでもなく信仰によりて得たる確然不拔の信念に供ふ心身相關の結果に外ならぬのである、即ち術者たる修驗者及び神官は、斯くせば火傷をすることなく無事に涉ることが出来ると云ふ確乎不動の信念、取りも直さず自己暗示の偉力の結果である、又神官に隨ひて涉りたる信者も之は大丈夫であると云ふ神官若くは修驗者と同一の信仰によりたる同一の結果である。昔織田信長の心膽を奪ひたる快川和尚が「心頭を滅却すれば火も亦涼し」と喝破して躍つて猛火中に入りたるも同一の理由で所謂不動心の妙果である、彼の成田不動明王の信者が寒中瀑水に打たれて凍死をせざる、或は嚴冬朔風を衝いて襦

袈一枚に寒詣りをなし毫も風邪に罹らざると同一の理由である、猶暗示術の上より説明する時は、例へば催眠状態にある者に疼痛を感じないと云ふ暗示を與へて針を突込み或は火を差付けても些の疼痛を感じないと同一理由である。

(九) 不動の金縛術

不動金縛術は、恰も鐵鎖を以て身體を縛れるが如くに、人の身體の自由を束縛する方術で有る、此方術は、元三寶院派及聖護院派の修驗者が眞言秘密の呪法を以て、行ひたるもので有つて、彼等の信念には、此方術は、不動明王の尊靈の威力によつて行はるゝものと確信して居たもので、不動の金縛と云ふ名稱も起つたのである、故に此方術は、俗人の行ひ能はざる尊嚴な秘法として、長く俗間の信仰を受けて居たもので、之を精神科學上から解釋するときは、無論催眠術の一部分に屬するもので

古來此術を行ひたる場合は、盜賊及び逃走者の足留めに多く用ひたのである、其實例として面白い噺がある、南河内の或豪家に於て、主人が大患に罹り、醫藥を盡したれども、其動験が現はれない、日毎重患に陥るので、一家擧つて悲嘆に沈んで居た、所が或日金剛杖を突き鳴らして法螺の音物凄く吹きたて、一人の修験者が其門前を訪づれた、斯る場合とて、早速其修験者を請して、病氣平癒の呪法を依頼した、修験者は形の如く表坐敷に祭壇を設け、加持祈禱を行ふて其夜は其豪家に客となつた、隣村に岩次郎と云ふ貧苦の者あり、此豪家の主人の病重きを知り、家族の看護の疲れたる隙を窺ふて、同家に忍び入り衣類其他金目あるものを風呂敷に包みて、荷造をなし、猶現金をも得んとて、表坐敷に窺ひ寄り、襖を明けて其坐敷を見ると、衣桁には結袈裟を初め山伏（修験者の事）の法衣が掛けられ、其下には縁管及び山伏の十二道具が置かれてあつた、岩次郎之を見て「ハテな」と思ひつゝ猶坐中を窺ふと坐敷の眞中

の床の上には、一人の修験者が端然と坐して苦々敷顔色で岩次郎の顔を見詰めて居たのである、此時修験者は宵の馳走の食傷の爲に腹痛を起して、爲に床上に坐して苦痛を耐へて居たので、自然顔色只ならぬ澁面をなして居たので有る、岩次郎此顔色を見て、忽ち身體の自由を失ひ、襖に手を掛けたるまゝ立ち蹙んで居た、此時修験者は初めて盜賊なることを知り聲を掛けたので家内の者共大勢集り來り、苦もなく岩次郎を取つて押へた、岩次郎も、修験者の爲に不動金縛りの法を行はれたものと信じて立ち蹙みをし、豪家の一族に於ても曲者は修験者の秘法に依つて金縛りに逢ふたものと信じて、此修験者を信仰すること愈々深く、四五日滯在する中、さしもの病人さへ平癒するに至つたと云ふ噺である、所が其實際は修験者が不動金縛りの秘法を行ふたものでも何んでもない、岩次郎自身が襖を明けて、思ひ懸けない山伏の裝束及び道具を見て、日頃恐怖せる不動金縛りの事を思ひ出したる刹那、修験者の只ならぬ顔色を見て、偕

こそ不動金縛の秘術を行はれたるものとの確信を起し、自ら其術に陥つたのである、即ち自己暗示によつて強直状態を來したのである。

(十) 禁厭術

禁厭(まじない)とは、或方式を以て諸種の災害病魔を未然に防ぎ又は既に罹りたる災害病魔を退散せしむる術である、我邦に於ては遠き神代の昔から行はれて居たもので神代記にも大己貴命が少彦名命と與に天下を經營するに當つて蒼生畜産の爲に療病の方を定め鳥獸昆虫の災害の爲に其禁厭の法を定めた降つて中世より維新前後に至るまで醫術及其他科學の進歩しない間は災害疫病の豫防及其退散治療等一にこの術によつたもので有る、是は無智の四民のみではない上は朝廷より高家武家に至るまで然らざるなしと云ふ有様であつた、特に幕府及び諸侯の大奥の如きは盛んを極めたもので遂には之を悪用して健全なるものを呪ひ殺すと云ふ。

▲大己貴
命と少彦
名命

▲禁厭と
祈禱

ふ慘狀を演じて所謂御家騒動の根元をなした例もある、偕其術者即ち禁厭は如何なる人の手によりてこれを爲されたかと云ふに奈良朝以來は全く僧侶神職の手に歸して居た、元來禁厭と祈禱とは其性質が相違するに拘らず僧侶は布教の目的を以て神職は神威の有難さを感じしむる目的なとから禁厭を爲す場合には必ず加持祈禱したもので、遂に禁厭と加持祈禱は離るべからざるものゝ如くに認めらるゝに至つた。

奈良朝及平安朝の初期にあつては國民一般の政治思想及宗教心は非常に低いものであつた、されば、上は國家の大事より下は一家の私に至るまで總て皆祈禱卜占に依つて之を決したのは寧ろ當然である、且つ諸般の分業の發達せざるこの時代に於て禁厭呪術は醫藥の代用で禁厭萬能主義の趨潮は朝野靡然たる有様であつた、其茲に至つた理由は如何かと云ふに彼の有名なる役小角が孔雀明王の呪を誦せる、越泰澄が密呪密器を持せる道慈律師が求聞持法を請求せるが如き其因をなしたには相違なき

▲禁厭の
代能の時

もそれ原因の一部である、この大勢力を造つた者は實に弘法大師である弘法大師は嵯峨天皇の歸依を得て屢々宮中に於て調伏息災請雨除疫等時に隨ひ場合に望み特異の法を修して大に其効果を著はした當時は政權及教權共に天皇親裁の下に在つて一度皇室の歸依を得れば何事も成らずと云ふことのない時代であつたから弘法大師が宮中で修せられた攘災除疫の大祕法は靡然として天下を風靡したのである、また弘法大師がこの祕法を修するには護摩壇を莊嚴にして五器の佛具を備へ微妙端嚴の五智如來若くは忿怒勇猛の五大明王或は諸天善神を請じて劍を立て護摩を焚き眞言を誦し印を結ひ莊嚴丁重にして人心を威服悚動せしめたから精神的治療術たる禁厭祈禱の效果の著しきは當然であつた大師は實に人心の歸趣と人間精神の機能を知つてこの祕法を修したのである。

されば禁厭は、奈良朝及平安朝の初めより佛教と離るべからざる關係を來して其形式も佛法より出てたるものが多くなつた、神職の方は弘法

大師の神佛不二論に壓されて、すべてが佛教化せられ獨立の位置を保つことが出來なかつた次第である、然るが故に佛教殊に眞言宗の方では役小角の遺鉢を傳へたるものと翻經三寶院派との修驗道が斯道を最も得意として居つた修驗者とは彼の山伏と稱するのが夫である。

禁厭と加持祈禱とは別種のものであると云ふことは前項に述べて置いたが猶之を詳細に説明して置く必要がある、井上博士は迷信解と妖怪學講義とに左の如く説かれてある「或寺の住持にて呪文を唱へて小兒の虫齒を治する者ある或日其寺に大法會ありて隣村の老婆も參詣せしに住職は齒痛を患ふる小兒を呼びて其頬に手を當て一心に「アビラウソカンソワカ」といへる呪文を三返繰り返して唱ふれば其小兒忽ち齒痛を忘れ其妙殆んど神の如く見へたり、老婆其側にありて大に感服し家に歸らば其法を試みんと思ひ居りしが偶々隣家の小兒が齒痛に惱めるを聞き、早速其兒を呼びて呪文を唱へんとせしに「アビラウソカンソワカ」を誤り傳へ

て「アブラオケソワカ」(油桶ソワカ)と記憶せるにも拘らず三度繰り返せしに忽ち痛みを感じざるに至れり、此事相傳へて一村中老となく少となく齒痛を患ふるものあれば皆争ひ來り老婆の治療を求むるに其都度必ず油桶ソワカを唱へてよく之を醫治したりと、若し虫齒の癒るは呪文の力ならば油桶ソワカを唱へて治すべき道理なし、若し油桶にてよく治するなれば味噌桶ソワカにても酒桶ソワカにても醬油樽ソワカにても差支なき筈なり、果して然りとせば呪文其者の力にあらずして其マジナイを受くる方に必ず癒るに相違なしと信ずること明なり、されば其療法を精神療法若くは信仰療法と名づくる方適當なり」と、されば之を一讀するときは禁厭は其方式及手段が直ちに災害を豫防し病癒を治するに非ずして被治者の精神作用に偉大なる信仰を起さしめ、其信仰の力によりて効果を得ることを了知せらるるであらう、又加持祈禱に就きて左の如く説かれて居る「祈禱にも正當なるものと正當ならざるものとあり、正當

▲三密加
持の深

の祈禱は排斥するを要せずと雖も、不正當の祈禱に至りては淫祠と均しく之を排斥せざるを得ざるなり、抑々祈禱は我邦にては加持祈禱と稱へ二者同一の如く考ふれども決して然らざるなり、加持とは三密加持と稱して眞言宗の修法なり、所謂三密とは身密、語密、意密なり身密とは手に印契を結び大日の舉手舉足を移し行することなり、語密とは眞言陀羅尼の呪文を誦して文句を了々分明ならしめ、大日の金口の説法を自身に移し行くことなり、意密とは觀行者の心が瑜伽と相應し果徳の法樂を念ずることなり、又加持とは加持涉入と熟して佛の三密と衆生の三密を相加持涉入して即身成佛することを説く皆是眞言の教なり、然るに古來眞言の僧侶が主に祈禱を行ひしを以て、世間は加持祈禱と熟して神道に用ふる祈禱も眞言に用ふる加持も同様に看做すに至れり、而して予は今眞言の加持祈禱説を述べんとするにはあらず、唯々一般の祈禱説について其可否を判せんとするなり、祈禱なるものは人もし誠心誠意を以て之を行

▲暗示
亦加持
なり

はんか、其心内に良心の光明を啓發する功あること疑を容れざる所なり云々」と、以て加持祈禱の意義は分明すべし。猶加持とは、加は佛が人間に力を加ふるの意にして、持とはその加へられたる佛力を人間が堅く保持するの意なのである、これ催眠術に於ける施術者が與ふる暗示は加の意味に當り、被術者がその與へられたる暗示を保持するは持の意義に當るをもつて、加持なる言葉は催眠術の上にもすぐ適用する事が出来るのである。

(十一) 三 脈 術 (其方法)

▲守田寶
丹の三
脈術

三脈術とは東京下谷池の端に彼の有名なる寶丹の藥舖を持てる守田寶丹翁が駒込動坂の閑居に於て積年實地に研究せる結果正確なる奇効を顯はせる奇法である其實験頗る容易にして身に降りかゝる災厄を未然に知り又死期を豫知し勇氣を百倍することが出来る、其方法は禁厭等とは其

▲澁澤男
爵の信男

趣を異にし心理上及生理上より案出されたるもので其眞價に至つては東京を中心として多數紳士間に用ひられて居つた、然しこの術は至極簡單なる方法であるに拘らず奇効が顯著なもので、昨今ますます流行を極めて居る澁澤男爵の如きは其信仰者の一人で、過般渡米した時の如きも彼地で流行をさするなど、意氣込で居た、又名古屋歩兵第卅三聯隊上等兵別府善一氏は奉天大激戦の際斯術を施して勇氣を百倍し挺身彈雨を冒して聯隊長を危地より救ひ出した殊勳により破格にも金鷄勳章功六級を下賜せられたとて寶丹翁に感謝狀を寄せて來た、此外災害を免かれた杯の禮狀は積て山の如く近くば大阪大火、江濃地方大震災地よりも禮狀を寄せられたものが頗る多かりしとの事である、

▲日露戦
争の實
例

諸其方法は如何にと云ふに左の手にて俗に云ふ呪佛の兩側の動脈即ち頸動脈を測り同時に右手を以て左手の脈搏を之に比較し三所とも同時に脈搏を數ふるとが出来たならばヨシ目前に災害が起るうとも其身は必ず

▲危難を
離す
方法

無事て居らるゝ故に沈着に事を處することが出来る若し之に反して三所の脈が各々不揃である時は二十四時間うちに何等か凶變が身邊を窺ふのだといふのでその時は十分警戒をする必要がある、そして之を一日兩三回も試みると神經衰弱症の如き者杯は確に勇氣を百倍するの効がある。

(十二) 斷食法

人間最高の幸福は無病息災に在る無病息災は長生不老の基て何人も之を願はないものはない、斷食法は正に無病息災の良法である、彼の人事をなげうちて世の煩をわすれ常に幽閑をすみかとして寂黙を心とし山より山に入り峯より峯に移りて練行年をおくり薰修日を重ね曉、苔巖のさがしきを過れば雲、經行の跡をうづみ夜、蘿洞のかすかなるに眠れば風坐禪の窓を訪ふ、煙霞を嘗めて飢を忘れたる仙人の苦行も正しくこの意味である、併し人間が生涯食を斷つと云ふことは到底行ひ得べき事でない

▲體を
破る
事

▲體内不
二

い、が、人間の病氣が其十中八九は其空腹に發することの稀にして飽食の結果に出づるものゝ多きに鑑むれば斷食法の等閑に附すべからざることとて有ると云ふことが承認せらるゝ、人間の内體と精神とは恰も鳥の兩翼の如きもので例へば鳥が其翼を傷けるときは決して中空を翔ることが出来ない二翼共に傷きたる時其翼の傷は癒へても猶一翼の傷の癒へない場合に於てはこれまた決して飛行することが出来ないのと同様、人間の病氣も肉體と精神と同時に病むもので、たとへ肉體の病氣は平癒しても精神の病氣の平癒せざる時は決して健康體にはなれない、斷食法は肉體精神二つながら治療し得べき最良の法である、此斷食法で成効したのは米國の醫師ハスケル氏である氏は患者に對して投藥をしない、最も或特殊なる場合には藥を用ぬことはないが、藥を以て病氣を治療すると云ふことは氏の目的でない氏の説によれば病といふものは千も萬もあるべきものでない、科學の示す所によれば人の生命は血液の中に保たれるも

▲ハスケ
ル法

ので人を苦しめる所の病は即ち血液の中に毒物が混入して血液を不潔ならしむるより發するのて有る、この血液なるものは人間の用ふる所の食物及び之を用ふる方法の如何によりて消化作用及び同化作用を経て製造せらるゝから此理によりて完全なる消化作用と同化作用を得る様にして行きさへすれば清潔なる血液を造つて供給し健全なるを得るものである之に反して此消化作用と同化作用とが不完全に行はれておれば不潔なる血液を供給するが故に病氣を醸して不健全となるのであつて此不潔なる血液が全身中總ての部分で循環する故に抵抗力の最も少い箇所に堆積して茲に病を發するので病名の種々異なるのは即ち此不潔なる血液が堆積した場所の位置によつて其名稱を附せらるゝからて有る、人間の健康を保つに最も肝要なるものが二つ有る、即ち清潔なる空氣と日光がそれである人間は吞まず食はずに居ても數日間は死ぬものでないが、五分間も空氣がなくては生きては居られない亦日光なしでも忽ち衰弱して仕舞ふ

此要素に次て亦人間の健康を保つ法則が三つ有る即ち「睡眠」「食慾」「渴慾」である、普通一般に人は食物計りて體力が維持される如くに思惟して居るが是は間違ひである實際は食物よりも睡眠によつて維持されて行くのである、由來我々が睡眠をするのは毎日費した所の體力の回復をせんが爲て食物を食するのは唯だ體中の物質の滅消した部分を補給する丈に必要である吾々人間は悪しき習慣の爲に食慾の法則を誤つて居る天然の食慾は全然忘却して了つて病的食慾に支配せられて居る元來自然の食慾と病的食慾とは非常なる差のあるもので十歳位までの食慾は所謂自然の食慾であるが其後の食慾は人爲的即ち病的食慾の發達したものである故に健全を願はんとするにはこの病的食慾の習慣を破壊して自然の食慾の回復をなすのが最大なる要素で有ると云ふにある。

元來自然の食慾即ち自然的飢餓とは如何なるものであるかと云ふに、食いと云ふ念慮の萌した時の感覺が即ち天然自然の食慾だと云ふのは

誤りて之は習慣に支配せられた人爲的の食慾である、身體の必要より起る食慾ではなくて胃部より來る食慾で、即ち吾々人間の敵たる病源である、人は誰も天然の渴慾丈には承知して居る、此渴慾は口と咽で慾する即ち天然の渴慾を起した時は他の飲料よりも第一に冷水を慾しがるもので、此天然の渴慾を催す時に冷水を呑む程甘味なものはない、此天然の渴の時にさへ呑んで居れば腎臓病や之に附隨する病氣は決して起るものではない、其處で酒が呑みたいなどの感を生じるのは決して天然の渴慾ではない、病的作用で胃部から起つて來るのである、病的食慾も恰度これに同じである、天然自然の食慾即ち饑餓は第一に口と咽との其感じを生ずるもので此時に食を取つたなれば得も云はれない甘味を覺ゆる、天然の食慾は病的食慾の如くに物が早く食ひたい一分間も待てぬと云ふが如く急激に起るものではない、一時間や二時間の猶豫をしたとして身體の平均を失つて煩悶することはない、人間はこの天然の食慾の起つた時に食ふと

云ふ法則を守れば決して病を起すものではない。

仙人が不老長壽を保つ爲に食を避けたのも右の理由によつたもので絶體に斷食した譯ではない、また絶體に斷食の出來るものでない、即ち天然の食慾の起るを俟ちて食を取つたのであるから仙人は不老長壽の樂境に居たのである。

前に述べたる如く人間の病氣は身體と精神と双方共に病むもので、天然の食慾を取つて身體の健康を謀ると同時に、また精神の健全をも謀らねばならぬ物理學上から云ふても物には收縮と膨脹との二個の作用がある心を下に向けて陰氣にして居る時は吾々の肉體の原子が收縮されて幽鬱になる即ち死の不幸を招くとこになる、之に反して心を上に向けて陽氣にして居れば肉體の原子は膨脹する即ち精神が活潑になる、健康の幸福を得て長壽になるのである、人間の身體には細胞がある其細胞の空隙には微細なる一の物質があつて即ち靈魂が宿つて居る、心の持ち様が陽

氣なる時は此物質が膨脹して大に快活になり消化力を強め清潔なる血液を造りて不潔な血液を驅逐し病症ある組織を變じて健全なる組織とならしむるのである、以上の原理に基きて食事の法則を述べれば左の通りになる。

(一) 學理に適合せざる朝餉を喫することを全廢すべし之を全廢する時は病的食慾を根絶し自然的食慾を増進する事を得る

(二) 自然的食慾の感じ來るまでは如何なる事情に拘らず決して喫食すること勿れ

(三) 食事に臨んでは口中に在る食物の味あらん限り可及的長時間咀嚼を繼續す可し

(四) 食事と同時に決して一切の飯料を用ゆ可からず

ハスケル氏は之を以て長生不老の門に入る基礎として之によりて治療したる患者の數は實に枚舉すべからざる程である、其實験の二三を舉げ

て實行の緒とせん。

米國の或銀行員がハスケル氏の診斷を受けて断食療法を實行すべく最初空腹の儘で出勤した、其日は十一時頃から頭痛が仕出した此頭痛は其人が事務の爲に午餐を忘れた時分に午後に成つて起る例である、其時には食事をすれば必ず其頭痛が止るのである、此日誤つて餓くもないのに午後一時に食事をした、處がどうした事か終日頭痛が止まらない、此日終日不快に堪へず断食療法を中止すべく考へた、而し次の朝に成つて見ると幾分か工合がよろしい、何時もに比ぶると安眠もよく出來た、數年前より朝起の時は五體の疲れを感じるのが習慣になつて居るに例よりは元氣がよろしい尙一日断食を試みることに極めた、處が其日の晝頃に八年間以來始めて自然の饑じさを感じた、其時の食事の味は何とも云へない其後大に力を得て自然の食慾の起らない限りは断食することに決したが追々健康體になつて頭痛の病氣も全治したのである。

同人(どうじん)の妻女(さいむすめ)もまた十五年以上の久しき間喘息(あせん)と氣管支(きくわんし)加答兒(かたご)に悩まされて居たので其體質(そのたいしつ)は非常に纖弱(せんじやく)で少しも濕氣(しつじ)の多い空氣(くうき)や乾燥(かんばう)の空氣(くうき)に逢(あ)へば忽(たち)ち持病(ぢびやう)が起つて、時によりては一週間(いっしゅうかん)以上も悩まされる事(こと)が有(あ)る藥(くすり)と云ふ藥(くすり)は殆んど呑み盡(つ)して居たが、皆一時押(お)へて一も効果(くわうか)を收(こ)めたものはない彼女(かのじよ)も夫(おとこ)と同じく斷食法(だんじきほう)によつて見事(せいじ)に成効(せいこう)した、其(その)後(のち)八年間(はつねんかん)全く健全(けんぜん)な身體(しんたい)となつて今(いま)に現存(げんぞん)して居るのである。

英國(えいこく)貴婦人(きふじん)フローレンス、デキシイと云ふ人も關節(くわんせつ)レウマチスム(痛風(いたふん))の爲(ため)久(ひさ)しく悩まされて居た、之(これ)は非常(ひじょう)の大患(たいわん)で生存(せいぞん)は到底(たいてい)出來(こ)ないのだらうと云ふて居た、所(ところ)が此(こゝ)斷食療法(だんじきりょうほう)で全快(ぜんかい)せられた。

以上(いじょう)は疾病(しつびやう)治療(ちりょう)上に於(お)ける斷食法(だんじきほう)の效果(くわうか)を其實(じつじ)験(けん)の方面(ほうめん)より適例(ていれい)として記述(きじゆ)したまでである、此法(こゝほう)に依(よ)る時は酒精中毒(しゆじんちゆうどく)の如(ごと)きは譯(わけ)もなく治療(ちりょう)せらるゝのみならず、酒(さけ)の爲(ため)に悩(なや)んで居(ゐ)る酒好(しゆかう)も譯(わけ)なく禁酒(きんしゆ)することが出來(こ)るのである。

先年(せんねん)物故(ぶつこ)せられた戒律(かいりつ)嚴守(げんしゆ)の高僧(こうそう)釋雲(しやくうん)照律師(しやうりつし)はもとより肉(にく)を食(た)はず女(によ)犯(はん)のことあるべきわけも無く一日(いちにち)に一椀(いっわん)の飯(いひ)を執(と)り一盞(いっさん)の茶(ちや)を嚙(か)むのみであつた、普通(ふつう)の世俗(せきよく)からみれば全然(ぜんぜん)斷食(だんじき)ではないが、先づ斷食(だんじき)同様のものであつた、が、律師(りつし)は心身(しんしん)ともに健全(けんぜん)であつて、東奔西走(とうほんせいそう)錫(せき)を休(やす)むる暇(ひま)もなく傳道(でんどう)布教(ふきやう)に活動(かつどう)した、日露(にっろ)の大戦(たいせん)後(のち)には八十(はちじゅう)の老軀(らうき)を提(ひき)げて滿韓(まんかん)の野(の)に渡(わた)り旅順(りょじゆん)港頭(かうとう)、あるひは遼陽(りやうやう)原上(げんじやう)の鬼(おに)となつた忠勇(しゆいう)なる我が兵士(へいし)のために厚(あ)く吊魂(たうこん)の經行(けいぎやう)をなしたのである。また、北海道(ほっかいどう)より新領(しんりやう)土(ど)の樺太(へま)にまでも渡航(わたかう)して熱心(ねっしん)に布教(ふきやう)に従事(じゆんじ)されたのである。そして八十(はちじゅう)有(あ)りの高齡(かうれい)をもつて恰(ただ)も定(じやう)に入るかの如(ごと)く安(やす)すらかに世(よ)を去(さ)つたのであつた。律師(りつし)の如(ごと)く、斷食(だんじき)同様の生活(せいかう)にあつて、而(しか)も研學(けんがく)と布教(ふきやう)とに寧(な)日(にち)なく奮闘(ふんとう)してゐながら、鏗鏘(けいけい)として壯者(さうしや)も及(およ)ばぬ健康(けんかう)を保守(ほしゆ)したには矢張(やじやう)ハスケル氏(はスケルし)の説明(せつめい)のやうに、食物(じよくぶつ)と健康(けんかう)との關係(かんけい)があるのでなければならぬ。

(十三) 幽靈對話術

幽靈とは死したる人の靈魂が、精神作用によつて、主觀的に死人の形となりて、現はるゝものである。然らば順序として靈魂とは如何なるものであるかと云ふことを述べて置かねばならぬ、偕、靈魂に就ては古來二つの有力なる説がある、一を創造説と云ひ、一を生殖説と云ふ、創造説とは、人間の靈魂の起原に關する神學上の説であつて、此説に據るときは、個人の肉體は、兩親の肉體より生るゝものに相違ないが、其靈魂は神が個々の場合に當つて、一々之を創造して、出産の瞬間若くは其少し前に、其肉體に宿らしめて、初めて爰に靈魂を生ずるに至ると云ふのである。生殖説とは前説の宇宙の萬有は總て神の力によつて、創造せらるゝと云ふのに反した説で、肉體は勿論靈魂と雖も生殖の作用によつて生産せらるゝもので、決して個々の場合に於て、神が創造するものでな

▲靈魂と如何なるものなるか

▲中江兆民の靈魂論

いと云ふのである、以上を唯心論と稱して、靈魂の存在を承認したる上の説であるが又唯物論或は自動説杯と稱へて靈魂の存在を否認する説がある其説によると人類の如き高等の生物でも自動機械と等しく、其活動は徹頭徹尾機械的に起るもので毫も靈魂と云ふが如き特別の原理に基いて活動するものでないと云ふので我國に於ては故中江兆民居士等は其主張者で有つた斯る機微の問題は何百年争ふて居ても歸着する所のないのは當然で、まだ今日の人間の知識では之を立證して孰かに歸着せしむる資格はないのである今日の理化學者及醫學者が靈魂は偕おいて肉體生殖の原理を知らんとして、精虫の培養に腐心して居るけれども到底効を奏することは出来ない、故に之を議論の問題として討究するのは恰も水懸論で寧ろ信仰の問題とする方が至當ではあるまいか、爰に一言して置くことは如何に精巧な自動車でも其自動車を造りたる自動車以上の能力がなくてはならぬ、又自動車其物は如何に巧妙を極めた機械であつて

▲自動車と靈魂

も之を活動せしむるには電気若くは石油等の動力がなければ活動はしない其電気若くは石油等の動力は人間の肉體を活動せしむる靈魂ではあるまいか、世界到る所苟も人間の住むて居る所に靈魂若くは精神と云ふ語のない國は無い所から考ふも決して靈魂の存在を否定して居ないとも分る、唯この靈魂と云ふ語が宗教上の言葉であつて語に弊があるかも知れないが靈魂と云ひ精神と云ひ心意と稱するも總て同一である、尙爰に靈魂の存在を承認する有力なる信仰説がある、それは佛教の輪廻説であつて、此説は獨り佛教のみに止らず西洋の哲學者間にもこの點に重きを置いたものが尠くない、其輪廻説とは人間の靈魂は不滅なること、人間の肉體の死亡するときは其靈魂は之を宿さんが爲に生る、他の動物の體内に入るもので、吾人の靈魂は吾人が現世に於てなしたる罪業に應じて人間以上若くは人間以下の動物の肉體に轉生する斯く轉生し行きて陸上水中空中各種の動物を一巡し終る時は再び人體に歸り來る此輪廻の一巡に

三千年を要すると云ふのである、これは佛教の關係から我國に於てこの信仰を持つて居るものは甚だ多い。

以上の諸説から綜合するも靈魂の存在を信ずる思想は一つの信仰である、既に靈魂の存在を認むる以上は幽靈なるものは有り得べき道理である、此所に佛説の輪廻論よりこう云ふ反對説が起る、靈魂の存在は否認しないが、靈魂が輪廻すると云ふ立場より見るときは肉體の死亡と共に靈魂は他の生物の體内に入るを以て幽靈として現はるゝ餘裕を持たぬと、之は甚だ淺薄な立論である輪廻説を承認するとした所で、輪廻なるものが悉く人間死亡の瞬間に他へ轉住するか否やと云ふことは人間の判斷を以て即決することは不可能ではないか、されば佛教より引用したる語に「輪廻に迷う」と言ふ語が存するではないか、輪廻に迷ふたる時間と空間之は幽靈となつて吾人に現はれ得べき餘裕ではないか、輪廻説既にこの餘裕が有るとすれば其他靈魂不滅説の立場より見るときは、死者が生前

の事に就て執念を殘し死後猶安んずること能はざる場合に幽靈となりて其形を人に見せ懐う所を告ぐるは有り得べき事を想像するに苦まない。既に靈魂の存在を認め、幽靈の現出を當然とせば、爰に猶一言を述べ置かねばならぬ事がある、抑も幽靈なる者は靈魂の出現である以上遍く世間に傳ふる如き、生前に於ける其人の形となつて色彩音聲重量等を備ふべき理由がない、其音聲の如き肉體の聲帯と云ふ機能を借りて初め發聲するもので、既に其機能を備へし肉體の亡びたる以上音聲を發し得べき理由がない、況んや色彩重量をやだ、若し夫れ理論の上より云ふ時は幽靈に形、色、聲、重量等を備へたるものゝ有るべき筈はないが併し古來日本のみならず全世界の各所に於て形を有し聲を有し色を有する幽靈に逢ふたと云ふ事實は枚舉に遑のない程多い、之は如何なる理由によるであらうか、云ふまでもなく前提に擧げたる精神作用によつて主觀的に現はるので、之れを催眠學上より云ふ時は自己暗示の結果、幻覺

若しくは錯覺を起すに外ならぬのである。

由來人間には弱點が多い、弱點が多ければこそ世に宗教の必要も起り、安心立命の道をも要求する、孔孟の聖人てさへ過まつて改むるに憚る勿れと云ふて居る、一生涯通じて一の罪惡（法律上の罪惡を云ふに非ず）をも犯さず平和の一生を送りたりと云ふ者はなからふ、されば道義心が高い丈け夫丈け普通人の罪惡とは認めないことをも之を罪惡と認めて心の苛責を受ける、この苛責が即ち人間道義の根元であると同時に亦人間の弱點である、若し自己の意執より他人を過ちたりとせよ心の苛責即ち良心の煩悶苦惱は自己の精神に偉大の暗示を與へ先天的若くは自己の智識より得たる所の幽靈の觀念が自己の過りたる者の靈魂と相通じて主觀的に其姿を現して茲に幽靈を認むることになるのである、但之は一例である、又先天的に腦裡に浸み込みたる場所、即ち淋しき寺院墓地等の如き幽靈の出る所なりと信念する所を通過するに際し、雨中又は其他の事

故によりて淋しいと感じたる瞬間に自己暗示の作用を起して奇異の觀念を誘起する、之即幽霊を認むる一例である、斯る現象よりして各自想像の程度によつて様々異なるものを観ることになる、故に此理を應用して幽霊との對話は容易に行はれるのである。

(十四) 神通力

神通力には、別に天眼通、遠觀術、縮地術などの名稱がある、而して神通力には二様の状態がある、一は催眠状態中に於ける神通力で、一は覺醒状態に於ける神通力である、また催眠状態に於けるものと覺醒状態に於けるものと、殆んど其状態が相似て居つて、兩者の間に判然たる區別を設くることの六ヶ敷ことがある、尤も之は獨り神通力の場合に限りたものではない、何事に依らず双方の極端なる場合は、區劃の定まらぬものが通則である、猶覺醒状態に於ける神通力にも、誘導的神通力と、

天然的神通力の二種がある、この區別に就いては後段で述べることにする。

抑も神通力なるものは、如何なる理由によりて行ひ得らるゝかと云ふに、斯術の原理に就いては、今日の科學界に於て未だ確然たる定説が立つて居ない、或説では催眠状態に在る時は、自我の觀念が消滅して、所謂無我の境涯に在るので、固より雜念等は起らない、故に其精神と宇宙の大我とが無有同化の作用により、宇宙間の現象が自己の意識に反應するのである、と云ふ説が巾を利して居る、之も一説として参考に價ひする、由來人には一種の潜在意識てふ、普通意識の下にかくれてゐる有力なる意識があつて、此意識の作用に歸するものとして居る説もある、弘法大師が神佛習合に就いて、伊勢大廟に參籠して神靈に感應したるが如き行教上人が宇佐八幡に參籠して同じく神威に感應したるが如き、要するに參籠中、諸の雜念を去りたる無念無想の中に潜在せる意識が神靈に

通じたる結果である、素より潜在的意識なるものは雑念の頻繁なる時には決して活動するものでない、而して催眠状態の時は決して雑念は起らない、所謂無念無想の境に在るを以て崇高的潜在意識は思ひのまゝに活動するを以て神通力なる幻妙の働を起すのである、又覺醒状態中に於ける神通力の現象も自己暗示の偉力によつて精神状態は其瞬間に於て必ず無我の境に在る即ち雑念を去つたる無念無想の状態に在るは勿論であるされば神通力とは時間及び空間の制限を受けることなく遠方の出来事及び現在未來過去の出来事を觀察知覺し得る微妙なる潜在意識の靈動と云ふを得べきものである。

由來神通力の研究は、數年來歐米に於て熱心に研究せられ、一時世界の人心を驚嘆せしめたものである、而して神通力と云ひ千里眼と稱し天眼通と唱ふる成語をなして我國に研究せらるゝ様になつたのは矢張十數年間以來のことであるが、斯る言葉こそなければ我國に於ては神代の昔より

り斯術の一部が行はれて居たと云ふことは神話傳説等から考究して事實を認めるゝが奈良朝以來佛教に關聯して僧徒の間に専ら神佛威靈の奇蹟と信じて實行せられて居た、支那に於ても同様である。彼の弘法大師が入唐して長安青龍寺の東塔院に惠果和尚を訪ふたとき和尚弘法の來るを見て笑を含み悦びをなして曰、吾、前より汝の來らんことを知りて相待つこと久し、今日適々相見ることを得たるは大によし、吾今報命盡きなんとして、正に大法を附屬するに人なし、必らずすみやかに香花をそなへ、灌頂を受くべしと云はれた。即ち惠果和尚は我平安遷都時代に於て既に神通力を得て居たのである。又た日蓮宗の日朗上人は豫て北條時宗の爲に鎌倉の土牢に幽されて居た、或日突如、赦されて佐渡に滴流せられ居る日蓮上人の流罪の赦牒を日蓮上人に達すべく之を授けられた。日朗大に喜びて其赦牒を襟に懸け、即日鎌倉を出立し夜を日に繼いで佐渡に向つて急行した、牢中憔悴の身を以て、星を戴き霜を踏み漸く佐渡に

渡りて師の滴所へ三里計の所まで來り、心神大に疲れて一步も歩行すること叶はず、喉を潤すべき水もなく、飢を凌ぐべき飯もなし、たゞ青苔滑にして夜陰に及び、濕氣に犯され死に垂とす、日蓮上人滴所に在つて之を知り、日興に命じて日朗を迎へしめ無事に滴所に來るを得たり、之又日蓮の神通力によれるものにして猶日朗が襟に懸けたる敝牒を捧げたる時日蓮亦之を豫期して點頭たりと云ふ。以上は其一例に過ぎないので有るが、其他斯種の事例は甚だ多いが、我邦に於ける實例は之に止めて歐米に於ける神通力、即ち千里眼の状態を述ぶることにする。

催眠状態に於ける現象は後述に譲り覺醒状態に於ける現象に就き誘導的千里眼と天然的千里眼との實例を示そう。

英國倫敦のエックス嬢と云ふは、斯道研究者の最も成效した一人である。嬢の自記中には左の一項がある、之れ即ち誘導的千里眼だ。一千八百九十二年八月十日デー(嬢の親交せる婦人)は家族と共に秋季間滞在せ

ん豫定にて、豫て求め置きたる田舎の別荘に出發した。尤も此別荘は妾はもとよりデーも未だ一回も見たことにはないのである。折柄妾も又他の地方へ旅行したれば二人の住所は二百哩を隔たつて居たのである。

同月十二日午前妾は鉛筆にて記せるデーの書信に接した、其書面を見ると狂犬の爲に非常な攻撃を受けたと云ひ、彼女と彼の飼犬とにて一心に防禦し居る中、應援の者も駆付け來りて、狂犬を逐ひ斥けたれども、其時は人と犬とを合せて二十餘箇所の傷を負ふたのである。而し彼女は僅にそれだけを記して詳細を記さない、是は從來屢あつた如く此報道より前に妾は既に例の手段で疾に承知の事と信じた故である。而し有體に云へば該事故のありたる當日は鏡に相談をせなんだので知らずに居たのだ。妾は其理由を報じて鏡に相談をした而して左の詳細を得た。

- (一) 攻撃した犬は黒き巨大なるリッリーヴァー種であつたこと
- (二) 飼犬は彼の咽喉へ噛み付きデーは彼部より彼を打つたこと

(三)其時ダーの衣類に就きても妾は詳細に知るを得た

此實例によつて誘導的神通力は或器械によりて感受を誘導するものであると云ふと分るてある。右の例は鏡に向つて感受を受けるので、即ち鏡に向つて居る間は靜穩なる状態を生ずるもので即ち雑念の發現がない。此鏡を凝視すれば必ず効力があると云ふ信念から、本人の自己の暗示によつて無念無想の境に入り茲に潜在的意識の活動を生じるのである故に其誘導物は必ずしも鏡に限つたことはいない、或は神燈を點じて之を凝視するもよろしい、或は守本尊を胸に當つるもよろしい、要は只自己の信念を高めて、雑念を去るの手段を取れば足りるのである。

天然的神通力は眞に不可審議極まる現象である、同時に崇高なる潜在意識の發動が顯然として證明せらるゝものだ。前例の惠果和尚及日蓮上人の實例は之に屬するのであるが、猶歐洲には實例が澤山ある。是も英國倫敦の斯道研究家の一人が或時獨乙の伯林に漫遊した伯林の斯道研

究家は、彼の旅館に訪問して其實験を見聞しようとした。所が彼は旅館に就くや否や突然外出して、暫くすると非常な憂色を帯びて歸つて來た而して彼の云ふには諸困つたものである、故郷の自分の宅の附近に火事があつて、友人の宅は既に危急に迫つて居る事によると、自分の宅も類焼するかも知れない。斯う云ふて彼は亦外出した又暫くすると歸つて來て、友人の宅は今焼け初めた。自分の宅へは五軒の間しか隔たつて居ないとして、立つても居ても居られない様子であつた。すると亦外出して今度は稍時間が経過して歸つて來た。少し喜びの色を帯びて居る、其時にア、やつと助かつた自分の宅の三軒目にて火を喰ひ止めた。友人は氣の毒であるが幸に留守宅は類焼を免れたとして、其夜は心持ちよく寢に就いた。翌日の電報に倫敦に火事が有つて彼の住つて居た町が大半焼失したとの事であつた。而して彼の宅は其三軒目にて鎮火して類焼を免れたとのことであつた。斯る實例は澤山あるが紙數に限りあるを以て之で留め

て置く。

我國に於ては前述の如く昔より行はれて居たれども、神祕的のものとして普通人の之を研究するものが無かつた爲に、有益の方面に利用し得なかつたのは如何にも残念である。而して我國で行はれた斯術の方式は多く覺醒状態に於ける自己暗示より起る誘導的神通力及天然的神通力に屬する方であつた、而し催眠状態に於けるものも絶體にないのではない。稻荷降し等は其例である、故に之を順序的に發達せしめたなれば偉大なる利益を蒙つて居たに相違ない。

前に述べたる如く人間には一種の潜在的意識が、或る機會に際して活動する結果上述せる如き不可思議の現象を來すものである、以上は早晩何人にも之を利用し得らるべきに至るは必然である。其の期に達した曉は電信電話の如きは無用の長物となり終るのである。

催眠状態に於ける神通力は、覺醒状態に於ける場合よりは何人にも容

易に實行し得られ且感應事實が最も的確である。素より覺醒状態に於ける斯術も其鍛練の如何によつては、何人と雖も確實なる結果を收め得べき事は云ふまでもない。然れども是には所謂精神の修練に於て前者の場合よりもより以上の困難がある。

この神通力を商業界に應用する時は、非常の利益を得らるゝことは、前述によりて明かなる次第であるが、とりわけ、之を期米株式の方に利用する時は、日々價格の變動を豫知し得るは勿論である、若し之を斯術の専門家によりて熱心に研究せられ、其奥義に達したなれば、百發百中の神妙なる域に達することは、毫も疑ひを容れざる所である。

幻術

▲幻術の
起原及
其名

幻術一に妖術とも云ふ貞丈雜記に「妖術者とは魔方遣の事也、此術も、天竺國より傳り來りたるなり、今時外法つかひともいふ也、げはうつかいと云ふは正法にあらざる、外の法を行ふ故、外法つかひと云ふなり、外道と云ふも同じことなり、一説に、げほう、あたまのかしらをきりて、土にうつめ置きて、そのしやれかうべを懷中して法を行ふ故、げほうつかいと云ふといへり、此説非なり、幻術をまぼろしと云ふなり、まは目也、ほろしはほろぼし也、人の目をまよはかして、色々さまざまのあやしき事を見するゆへ、まぼろしと云ふなり」とあり、魔法遣、外道遣、いつなつかひ、等の名稱は皆この幻術の術者が正法に基かざる外法を以て人の目に幻覺を起さしむると云ふ意味から起つたものである、何れの國でも魔法遣の事は神活傳説などに必ず遺つて居る所から考ふる

▲佛敎と
幻術

も幻術なるものは上古より行はれて居たものと思はるゝ、我國に於ても上古より行はれて居たと云ふことは種々の傳説によつて、想像することが出来るが、有史以來に有りては敏達天皇記に渡來僧司馬達等、佛舍利を齋食中に得、蘇我馬子に獻ず、馬子試みに鐵槌にて打てども碎けず、水に投ずるに浮沈心のまゝなり、茲に於ていよく佛法を信ずとある、これが即ち幻術に類したるものゝ記録の初である、平安朝に至つて安倍晴明が或神を遣つたと云ふことが大鏡、今昔物語等に見へて居る、日蓮上人が小寶寺の慧朝を屈したる角法の奇蹟は幻術の有名なるもので、日蓮上人一代圖繪に「この傍に一巨石あり、善智(慧朝のこと)最多角金珠を揉んで、祈るに忽地驗ありて、了得の巨石宙に昇る、觀るもの毛髮逆に立つ、高祖微笑なし給ひ、是既に云ふ邪術を以て衆を惑す所なり、我念じてこの巨石を備が頭上に墜さん、備よく持念して石の爲に打るゝな云ひも畢らず呪し給ふに、かの大磐石動き出して、善智が頭上に墜んと

▲安倍晴
明と幻
術

▲巨石中
空に昇
る

す、善智驚き珠數おし揉んで、これを除かんとするに能はず、因て高祖に罪を謝し、後に高僧の弟子となる」とある、また神史院本の類に現はれたる幻術の術者は、自來世、相馬太郎良門、瀧夜叉姫、石川五右衛門、仁木彈正等其重なるもので、仙代萩御殿の切りに、丈拔群の大鼠が男之助に逐ひまくられ、變化の正體を現はして仁木彈正の姿となり、九字を切り印を契びて遁形する所は屢々歌舞伎に演ぜられて有名なるものである。

近頃歐洲に於ても魔法遣のことに就きては一大問題が起つて居る、此問題の本尊は、伊太利の一農夫の娘で「ユーザビア、バラヂー」と云ふ辛じて自己の氏名を署し得る程の無教育な女であるが、不審識極る魔法を行ふ力を有して、十年以前から世に傳へられ、英佛西露の諸大學に於て研究の資料に供せられて居る、彼女の行ふ魔法は種類が甚だ多い、其中の二三を擧ぐれば、電燈の光り赫々たる大學の講堂内に於て、彼女を椅

子に坐せしめ、其手足を縛して置いた、彼女は椅子の上に縛せられたるまゝ、己の後方に他人の隠し置きたる器物を、前面の卓上に自然に動き出さしめる、また自分の頭上に不思議なる人鏡を現出せしめる、或は空中よりニューと手ばかりを現出せしめて、此術を一生懸命に研究せる學者達の顔を撫でさせて、研究者をして覺へず慄然たらしむる、又數人の乗りたるベンチを空中に浮き上らしむることもある、此等の魔法を行ふ時、彼女は昏睡の状態に在りて、自ら何事を爲たか知らずと云ふて、悉く神の所爲であると稱して居る。

此方術に就ては、歐洲中幾多の學者が多額の金錢を費消しつゝ、研究に研究を重ねて今日猶解釋するものが出来ない一問題となつて居る、而し我邦に於ては前述の如く鎌倉時代に於て日蓮上人及び豊朝等に於て演せられたるのみならず、猶其以前に阿部晴明、弘法大師等斯種の奇術を行ひたるものは枚擧に暇のない程あるが、由來我邦では、斯る事を悉く神祕に

神祕の
扉を開
ければ
非凡の
術あり
幻術の
解決の

歸して仕舞つて、其神祕の鍵を握らふとする學者が無かつたのである。最早今日では魔法遺の方術を神祕のものとして祭り込んで置く時代ではない、必ず神祕の扉を開かねばならぬ、由來神祕と唱するものは其扉を開けば概ね平凡のもので如上の現象を科學上より観るに毫も不可思議不可思量このにあらず、要は催眠學上の錯覺、又は幻覺の理に外ならぬのである。

不良少年感化法

不良少年は、遺傳より生ずるものと、境遇より來るものと、二個の原因がある、遺傳より生ずる不良少年は、腦に缺陷があるとか、又は身體發育の状態に異狀があるとか、要するに一種の病的であるから此の方より生ずる不良者は、其の數も多くない。境遇上より來る不良者は、境遇

不良者
の生ず
る原因

不良少年
の養成
する方

上流社
會と公
心

其もの、種類が多いだけに、不良者の數もまた多い、随つて不良行爲の種類も亦至つて複雑である、而して境遇上より生ずる不良者は中流の社會に少くて、劣等社會と上流社會の子弟に多い、劣等社會に在りては、家庭の教化が零である、寧ろ悪事を勧めると云ふ傾きがある、彼等の社會には道義などの觀念は更でない、日常の生活に迫はるゝ結果、親からして悪事をなしつゝあるので、斯程の連中が群居して居る部落では、甲の悪事を乙が見習ひ丙の悪事を甲が學ぶと云ふ格で、不良行爲を教ゆる學校の如き有様であるが、併しながら、健全なる社會の方面では此連中の行爲を悪しきものとして齡しないから、其害毒は其一部に止りて一般の健全なる方面へは餘り傳播しないのである、また感化事業の發達につれて、是等の不良少年は、其徳に浴して漸次善良の方に向ふのであるが上流社會に生ずる不良少年に至りては、其悪化を健全なる方面へ及ぼすとも非常なもので、特に憂ふべきは、上流社會及び富豪の輩は如何に感

化事業が發達して、感化院が幾個出來た所で、家名などに重きを置きて其子弟を之に送る程の勇氣はないのである。

試みに都下の新聞紙を披き見よ、不良學生が徒黨を組みて良家の子女を誘惑し墮落せしめつゝある記事の如何に多きことよ、是等の少年は孰れも劣等社會より出てたるものに非ずして、相當の地位ある者の子弟であるではないか。

上流社會及び富豪の輩が、其不良子弟を取扱ふ徑路を見るに、彼等の家庭は外見こそ立派に見ゆれ、其内幕に立入りては、實に不健全極まつたものが多い、一家を訓化すべき家長が、待合遊び花合戦はをろか、妾も置けば侍女にも厭むるゝ、子弟の之に見習うのは當然の事て、斯る家庭に雇はるゝ侍女共も、また主人の行爲に見習ひて、まづ若様をその、かす、彼等不良の行爲が情慾の方面に發達するのはこれが爲である、既に不良の萌しが現はれても、主人の素行が素行であるから、嚴重な意見

も出來ない、また意見をして利目がない金錢を不自由にするが關の山だ、「雪の日や不幸者奴のおりどころ」愚なる子程猶可憐のは母親の常て、主人に隠して金を給與ぐ、子は之をよきことにして益々不良の行爲を敢てする、遂に手の付け様がなくなつて勘當と云ふことになる、此所まで來ると不良行爲の勉強は充分に卒業して、健全なるものをも誘ひ込んで憎まれ子は世にはびこると云ふ事になるのである。

例ひ懲しめの爲にもせよ、家庭の外へ出すのが間違つて居る、不心得千萬な奴で勘當をしたと云へば、感化院へ入れたと云ふよりは世間體が立派らしく思はるゝて有らうが、之は公徳心のない遣り方で、其世間體を飾るが爲に、社會の受ける害毒は幾程で有らうか、慄然たらざるを得ないのである、斯の如くにして不良の徒の益々増加しつゝあるのは、其親の無責任の結果ではないか。

其不良者の原因及び行爲の如何を問はず、また社會に對する害惡の有